人文会ニュース

jinbunkai news
August 2023
NO. 144

1 代表幹事挨拶 片桐幹夫
2 15分で読む 関東大震災一〇〇年 尾原宏之
17 書店現場から 紀伊國屋書店新宿本店 アカデミック・ラウンジについて 後藤 崇
24 図書館レポート 企画展示と図書館 ――展示を通した司書の人材育成 河合郁子
36 編集者が語るこの叢書・このシリーズ㉗ ミネルヴァ書房「論点」シリーズ 岡崎麻優子
委員会活動方針
人文会活動報告
人文会年次総会報告

www.jinbunkai.com

別冊太陽 日本のこころ309

河合隼雄

たましいに向き合う

河合俊雄＝監修

「こころの問題」を考え続けた臨床心理学者・河合隼雄。魂とは何か？物語とは何か？日本文学、絵本、神話、昔話、音楽など、多領域にわたるその仕事と生涯を辿る。

A4変型判／152頁
定価2640円（10%税込）

平凡社 〒101-0051
東京都千代田区神田神保町3-29
tel 03-3230-6573 fax 03-3230-6587
https://www.heibonsha.co.jp/

生まれつき男社会に服従する女はいない

ガルシア フェミニズムに残された女の「服従」という難問。その原理を解明した気鋭哲学者の快著。横山安由美訳 三六三円

信じる者は破壊せよ

ニクシー キリスト教はいかに「唯一の信仰」が支持される時代を招いたか。暗黒の古代史を追う。松宮克昌訳 四六二〇円

ニジンスキー 踊る神と呼ばれた男

鈴木晶 今なお創作の源泉である伝説のダンサーの魅力と謎とは？バレエ史研究の第一人者による評伝決定版。五七二〇円

励起

伊藤憲二 日本の科学研究のインフラはいかに築かれたか。「原子物理学の父」仁科の壮大な伝記。上五四〇円 下六六〇円

仁科芳雄と日本の現代物理学〔全2巻〕

みすず書房（税込）
東京本郷2-20-7 www.msz.co.jp

法政大学出版局
https://www.h-up.com/

村松剛

保守派の昭和精神史

神谷光信 著

東西冷戦期に「保守」として活動したフランス文学者・文芸評論家，村松剛。その生涯と著作を丹念に追い，いかにして保守派の代表的知識人となったのかを記す初の評伝。 4950円

中野好夫論

「全き人」の全仕事をめぐって

岡村俊明 著

戦後日本を代表する翻訳者にして在野的知識人の，文学論や伝記作品，憲法や沖縄や都政をめぐる市民運動に及ぶ全仕事を，彼自身の言葉を通して振り返る初の試み。 5170円

〒102-0073東京都千代田区九段北3-2-3
☎ 03（5214）5540 ／表示価格は税込です

中田薫

【人物叢書319】 北 康宏著 2640円

日本の法制史学の創始者。従来の支配者目線の日本歴史を個人の権利意識から私法史として捉え直した。その学問形成とともに「大学の自治」「学問の自由」のための闘争など、知られざる生涯を描く。

時に大衆を動かし、時に統制されながら
近代日本を動かした〈メディア〉の存在とは！

近代日本メディア史 全2巻

有山輝雄著 各4950円

〈Ⅰ〉1868―1918 明治維新後の「文明開化の新聞紙」から政府による統制、第一次世界大戦まで。
〈Ⅱ〉1919―2018 新聞紙によるニュースからラジオ・テレビ・インターネットによるニュースへ。

吉川弘文館 東京都文京区本郷7-2
☎03-3813-9151 税込

代表幹事挨拶

みすず書房　片桐幹夫

2023年5月19日に行われた人文会年次総会において、代表幹事を拝命しました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

他の役員人事として、書記幹事・水口大介氏（創元社）、会計幹事・片山伸治氏（吉川弘文館）、春秋社の吉岡聡氏が〈販売・企画〉委員会委員長、青土社の森卓巳氏が〈調査・研修〉委員会委員長、白水社の岩野忠昭氏が〈広報〉委員会委員長として、すべての幹事が再任となりました。この6名の幹事で今後1年間、会の運営を担うことになります。また、各委員会の副委員長として、〈販売・企画〉委員会副委員長に段塚省吾氏（紀伊國屋書店）、〈調査・研修〉委員会副委員長に澤畑塁氏（東京大学出版会）、〈広報〉委員会副委員長に乙子智氏（慶應義塾大学出版会）が再任されました。

一方、残念ながら、日本評論社が一年間の休会になりましたことをご報告致します。

書店店頭の状況はコロナ禍を経ていっそう厳しさを増し、流通再編の動きもさらに加速しております。このような中で、人文会は今夏、『人文書販売の手引き』の改訂版（WEB版）をリリース致します。書店様に向けて、人文書を販売する意味を改めてお伝えすると共に、読者の皆様には人文書の奥深い楽しさをさらに知って頂きたいと願い、制作致しました。

人文会はこれからも、良書の刊行を続けて参ります。そして、読者の皆様に良書をお届けするための新たな施策を吟味し、積極的に取り組んで参ります。出版業界の皆様と力を合わせ、共に、様々な課題を乗り越えていくことができると確信しております。本年も、役員、各委員へのご指導・ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

関東大震災一〇〇年

尾原 宏之（甲南大学法学部教授）

震災といえば、「風化させるな」「記憶の継承」などの文句がやたらついてくることが増えたように感じられる。誰もが知っている直近の大震災、東日本大震災ですら一二年の一昔になった。昨年実施されたNHKのアンケート調査によれば、震災の記憶や教訓の「風化が進んでいる」と感じる人が被災地の岩手・宮城・福島でも六三パーセントに達したという。一生に一度の深刻な経験をした人々がそう感じるのだから、多数の非被災者にとってはなおさらだと思われる。

この稿の筆者は東北出身者（被災三県の隣県）だが、長い東京生活を経て数年前から関西に居住している。そのせいもあってか、東日本大震災について話をする機会が極端に減った。そもそもこの地で使われる「震災」という言葉は、一九九五年の阪神・淡路大震災を意味することが一般的である。ついでにいっておくと、恐怖されている次の地震は南海トラフ地震であって首都直下地震ではない。

さて、本稿の主題は一九二三年九月に発生した関東大震災である。今年は、ちょうど一〇〇周年にあたる。この震災に関してすら、いまだに「風化させるな」「記憶の継承」のかけ声が飛ぶ。それにはのちに触れるようなもっともな理由があるのだが、関連出版物の刊行数から察するに、九〇周年にあたる一〇年前よりもこの震災に対する関心は低下しているようである。というより一〇年前は、東日本大震災の発生によって喚起された関東大震災に対する大きな関心がまだ持続していた、と見たほ

うがよいかもしれない。実に安易ではあるが、「国立国会図書館サーチ」でキーワード「関東大震災」を入力してヒットする書籍や記事・論文などの数を出版年ごとに調べてみた。東日本大震災の前年二〇一〇年は一二〇件だったが、翌二〇一一年に三八〇件と三倍以上に増加した。二〇一二年は二二二件、関東大震災九〇周年の二〇一三年は二九一件、二〇一四年は二九七件である。ところが二〇一五年、一気に一〇〇件以上減って一七八件となる。それ以降は東日本大震災前の水準に戻って年間一二〇件前後で推移する。今年は半分すぎた段階で一〇〇件を突破したので、例年より多いだろう。関東大震災に関する研究史がこれまで「周年行事的に進展してきた」ことを歴史学者の吉田律人氏が指摘している。多少のタイムラグはあるとしても、今後もそのパターンをたどるのかもしれない。とはいっても、一〇〇年の大きな節目を超えると本格的に関心が沈滞することも想像できる。不謹慎だが、将来首都直下地震や南海トラフ地震が発生して関心が再浮上することも考えられる。

関東大震災のみならず、震災をめぐる語り全般が敬遠されているので需要が減った、ということもありうる。たとえば、試みにGoogle検索で「震災特番」「震災番組」などという言葉を入れてみると、すぐ「うんざり」「うざい」などの予測ワードが出てくる。二〇一六年には、まだ震災から五年しか経過していないのに「震災特番」「視聴率全滅」が意味するもの」などという週刊誌の記事が話題になった。震災を風化させまいとするメディア側の熱意が敬遠されがちなのはたしかなようで、積極的に忌避する層が形成されたとしても不思議ではない。これは、千差万別である個々人の被災と再起の経験を、繰り返しテレビ（新聞）向け「ストーリー」の鋳型に流し込み続けたことで生じた忌避感のように思われる。多数の自主的な避難者を生み出した放射能騒動の、あの不快な思い出を呼び戻したくないという向きもあるだろう。被災者に対する同情や震災後の不安な気持ちが薄れるにつれ、付随していた関東大震災に対する関心もいつしか小さくなっていったのかもしれない。

一般の読者が手に取りやすいのは、ぶ厚い研究書より文庫本である。大正期に震災を直接経験した著者による作品の文庫化（新たに論考などを編集したものも含む）に着目すると、二〇一一年の震災直後には清水幾太郎『流言蜚

語』、寺田寅彦『天災と国防』『天災と日本人』『地震雑感／津浪と人間』、田山花袋の震災記録である『東京震災記』などが続々と刊行された。二〇一三年には宮武外骨の『震災画報』や、震災前後の東京の変化を知る上で欠かせない、芥川龍之介、島崎藤村らの筆による『大東京繁昌記』下町篇、山手篇も出た。今年は現在のところそういった動きは少ないようだ。一方、後世の研究者らの作品では、歴史学者鈴木淳氏の『関東大震災――消防・医療・ボランティアから検証する』やライター内田宗治氏の『関東大震災と鉄道』などが文庫化されている。いずれも、骨太の学術的知見やデータの読解に意外なエピソードが加わり、読者の震災イメージを豊かにしてくれる作品である。

たしかに一〇年前より関連書籍の出版事情は低調に見える。だがそれは、関東大震災に関する研究と考察が低調であることをまったく意味しない。むしろ震災を捉える視野は広がり、思考は深まってきたとさえいえる。一〇〇周年を機に新刊として出された、二人の大家による作品はそのことを物語っている。

武村雅之氏の『関東大震災がつくった東京』は気軽に読める選書だが、地震学・地震工学の立場から震災の実像を明らかにしてきたエッセンスが詰まった一冊である。マグニチュードや震度、火災の真相に迫る第一章の記述から引き込まれる。一般に関東大震災のマグニチュードは七・九といわれるが、実はこの数字の明確な根拠は長年不明であった。武村氏は、三〇年前に岐阜測候所の観測記録を発見して以来、各地の気象台や大学を訪ね歩いてデータを探し求め、M＝八・一±〇・二という数字に達した。その上で、結果として許容範囲だった七・九がどうやって生み出されたか、推論を加えている。

実際のところどのぐらい揺れたのか。武村氏はデータ間の住家全潰数の不整合を解きほぐして揺れの分布を解明し、震源断層面にあたる神奈川から千葉南部で震度七、東京市一五区は最大で六強という数字を導き出した。クローズアップされるのは東京の被害だが、本震の揺れの中心は東京ではなかった。

地震発生直後の九月一日から翌年一月にかけて関東地方はマグニチュード七を超える巨大余震に六回も襲われた。本震の三分後から立て続けに三回起きた余震の被害

は本震の被害と区別できない。マグニチュード七・二の最初の余震の震源位置は来たるべき首都直下地震のそれに近く、武村氏は「東京は関東地震の直後に首都直下地震に襲われていた」と指摘する。

しかし武村氏は、同時に揺れの中心は東京ではなかったことも強調する。それなのに、東京市一五区は関東大震災全体の死者・行方不明者約一〇万五〇〇〇人の六割を超える約六万九〇〇〇人の犠牲者を出した。原因は猛烈な火災である。東京市一五区全体の焼失率は六六・五パーセントに達し、現在の中央区にあたる日本橋区と京橋区をはじめ、浅草区、神田区、さらには江東地域の深川区、本所区がほぼ丸焼けとなった。犠牲者のうち約五万九〇〇〇人は江東地域で命を落としている。揺れの中心ではない東京、特に江東地域で莫大な被害が出たのは、明治以来の都市政策が間違っていたからだ、と武村氏は結論づける。現在の中央区にあたる二区は震度五で、建物の全潰率も〇・八パーセントにとどまったが、焼失率は一〇〇パーセントである。関東大震災のすさまじい被害は、都市の基盤整備が行われないまま、増加する人口を受けとめる木造密集地が拡大、過密化し続けた結果であった。

震災後、マッチ箱のように燃えやすい木造建築物が乱立し、逃げ道になる道路に覆い被さっていたことを回顧した人は多い。都市工学の専門家ではない知識人や作家も、自身の被災経験の中で問題の所在を体感していた。「都市集中の猛烈なる傾向は所謂近代文明の執拗なる要求である」と叫んだ数学者の藤澤利喜太郎は、壊滅した本所・深川の両区を放棄するか、厳重な建築規制を行うべきと訴えた。震災直後に筆を執った人々の実感は、データに精緻な分析を加えた武村氏の仕事によって裏付けられたともいえる。

武村氏の研究には、足で稼いだ成果も数多く含まれている。古くから東京に残る慰霊碑を読み取り、帝都復興事業の時期にできた公園や橋梁、建築物をめぐり、災害と復興がいかに現在の東京を規定しているかを個別具体的に示してくれる。その意味で、この本はすぐれた東京ガイドブックでもある。帝都復興の生みの親とされる内務大臣後藤新平に対する評価が冷静で客観的であることも印象的だった。

本書は、来たるべき首都直下地震への懸念で締めくく

られている。帝都復興で生まれ変わったはずの東京は、空襲による壊滅を経た戦後の乱開発の結果、きわめて危険な状態となった。地下水のくみ上げによる地盤沈下で江東地域には海抜ゼロメートル地帯が形成された。郊外には木造密集地域が広がり、都心部には超高層ビルが、湾岸埋め立て地にはタワーマンションが林立、街を歩けば頭上に首都高がのしかかる。これらは、経済成長最優先でひたすら「スクラップ&ビルド」を繰り返してきたことによってもたらされた危険である。江戸の地震から未来の首都直下地震までを追跡した武村氏の問いかけは重い。

一〇〇周年を機に刊行されたもう一つの大家の著作は、長年にわたって災害史研究をリードしてきた北原糸子氏の『震災復興はどう引き継がれたか』である。三部構成、五一二頁にわたる大著の第Ⅱ部は、二〇一一年刊行の『関東大震災の社会史』を再録したもので、震災直後の救護と避難に焦点をあてた研究成果として定評がある。

当座の食料や水の配給に始まる救護は、膨大な数の避難民がどこにどの程度いるのかを把握しなくては実施できない。家族を必死に探す者も数え切れず、避難民を収容するバラックも必要である。焼跡で困難な救護に取り組んだ公的機関の活動や、尋ね人探しに尽力した学生ボランティアを含む人々の営みが克明に追跡されている。

また、被災地からは八〇万とも一〇〇万ともいわれる人々が、鉄道や船舶などを使って地方に避難した(武村氏の著書では東京府下への避難を含めて約六七万人)。彼らは沿線各駅で救護を受けつつ目的地へ向かい、やがて道府県や地域の支援を受けた。避難民の動きと救護の広がりを俯瞰する貴重な研究で、震災九〇周年の二〇一三年に『朝日新聞』「ニュースの本棚」で原著を紹介させていただいたこともある。

震災のヨコへの広がりを描いた第Ⅱ部に対し、書き下ろしの第Ⅰ部「「近代復興」の起点・継承・その終焉」は、復興史のタテの流れを追った研究といえる。その特徴は、関東大震災時の帝都復興と東日本大震災時の復興をつなぐ結節点に、一九三三年の昭和三陸津波を位置づけたことだろう。岩手・宮城・青森・北海道にまたがる死傷者約四二〇〇人、流出・倒壊などの被害約一万件以上というこの津波からの復興は、基本的には漁村農村の

復興であった。首都再建事業である帝都復興とはまったく性質が違うはずだが、被災地の行政担当者は後藤新平をロール・モデルとし、「帝都復興理念の農村版」のような託児所、浴場、組合店舗、集会所、図書館などを備える「新漁村」を構想したと北原氏は指摘する。

関東大震災、昭和三陸津波、東日本大震災の三者を貫くキーワードは、第Ⅰ部のタイトルにある「近代復興」である。北原氏によれば、政府、官僚主導による「一元的な公助の体制における復興メニュー」を基本とする復興のあり方を指す。昭和三陸津波でも採られた復興路線は、根本的転換が図られないまま東日本大震災に踏襲されたという。

「近代復興」は、都市計画を担う建築家たちが作り出した造語で、東日本大震災の復興を批判的に検証するための言葉とされる。人口減と低成長の時代、とりわけ過疎化と高齢化が著しい東北地方の沿岸部で、国が莫大な予算を投じて高台への集団移転を推進し、同時に被災した土地をかさ上げして市街地を再建するような復興は見なおすべきだ、という認識を含んでいるようである。巨額の費用をかけて造成したかさ上げ地が空き家だらけ、といった批判を耳にする機会も多い。関東大震災に始まる、経済成長や人口増加を前提とした復興路線は東日本大震災で終わりにしなければならない、というメッセージを読み取ることもできよう。

武村氏は、経済成長最優先の東京乱開発から脱却し、「安全安心で文化的な街」を目指すべきと説く。理想の一つとして示されたのが帝都復興後の東京である。北原氏は、関東大震災から昭和三陸津波を経て東日本大震災の復興にいたる軌跡を追う。そこでの帝都復興の位置づけは両義的である。後藤新平をシンボルとする帝都復興の理念は昭和三陸津波後の「新漁村」構想をもたらした。しかし、関東大震災を始点とする「近代復興」が、人口減と低成長の時代にそのまま通用する見込みは薄い。武村氏、北原氏とも、関東大震災とその復興の経験が現代に投げかける光と影の双方を、長い災害と復興の歴史に位置づけて描いたといえる。

一〇年前の関東大震災九〇周年（正確には東日本大震災直後）には、後藤新平ブームがあった。一九二三年一二月、摂政の皇太子裕仁親王が狙撃される虎ノ門事件が発生し

て第二次山本権兵衛内閣は総辞職、後藤はわずか四ヶ月で内務大臣の地位から去り、力を失った。しかし東日本大震災後、日本全体の脆弱性があらわになる中で、後藤が主導した都市計画やリーダーシップのあり方が理想像として大きく浮かび上がってきた。

一〇〇周年に際しては後藤再評価の大きな気運はない。正直なところ、本稿の筆者は九〇周年の頃から後藤と帝都復興を賞賛する傾向にあまり好意的ではなかった。それは二つの大きな理由による。

第一は、後藤本人の言動と後世の賞賛の説教臭さが鼻につくという素朴な理由である。後藤の当初の帝都復興計画は国家予算約一五億円の二倍を超える四〇億円規模ともいわれ、すべての焼跡を買い上げて「理想的帝都」をゼロベースで建設する壮大なものだったとされる。この計画が最終的に縮小した責任は、土地区画整理事業に抵抗する強欲な東京の中小地主、党益第一の政党政治家などに帰せられることが多い。そこで対比的に賞揚されるのは、私利私欲を捨てた公共奉仕の精神と、それを訴える後藤である。

たしかに、一人一人が既得権を譲って区画整理に応じなければ道路も公園もできない。しかし「日本帝国の自治制と云ふものは義務が根元」と説く後藤の「公共心」なるものは、結局のところ優秀なテクノクラートが案出する都市計画に従うことが「公共心」だ、といっているように思えてならなかった。学校の道徳の授業や教師肝煎の生徒会長の演説に反発する層は必ず出てくるものである。そして、小泉信三や白柳秀湖のような人々は、私利私欲の追求が復興の原動力たりうること、住民が形成してきた歴史的な「都市の人文的関係」を軽視すべきではないことを主張していた。

第二に、後藤を再評価する論者が描く理想の東京は、筆者にとってそれほど魅力的ではなかった。もちろん、帝都復興後の東京にタイム・スリップできたら群衆の一人として感涙する可能性は高い。だが、その膨大な計画には今日の東京一極集中、東京至上主義の原点があるように感じられた。東京人の豊かで快適な暮らしを強化するために地方を犠牲にするのはやめろという主張には理があるようにも思えた。

加えて、安全性に配慮した広々とした道路、緑の空間に満ちた東京は、少なくとも筆者が魅力を感じる東京で

はなかった。どうしてもそういうものが好きだったら地方に移住すればいいのではないだろうか。筆者が住んでいたのは、都市計画家が木賃ベルト地帯、木密地域などと呼んで「負の遺産」あつかいし、再開発の対象にしがちな地域、またはその近隣だった。具体的には高円寺や阿佐ヶ谷など中央線沿線の飲み屋街を中心とするエリアである。だがそこには、高名な作家、映画監督から失業者まで、あらゆる人が対等に気さくに適当なことを語り合う汚いバーや居酒屋、安い定食屋があった。個性的な本屋があり、古本屋があり、名画座があり、ちょっとおいしい野菜や豆腐などを売っているおじさんおばさんの店があった。田舎から出てきて自由を満喫する金のない人の住む木賃アパートがあった。変な人、面白い人やマニアックなものに日々出会って楽しく生活できることも東京の魅力であり、それは快適な都市環境と必ずしも一致しない。関西、特に阪神間に住んでいるとそれをしみじみ感じる時がある。

　既存の東京を再開発して安心安全、モダンな施設や住空間を作り出したところで、想像できるのは大手ドラッグストアやコンビニ、シネマコンプレックス、チェーン飲食店または個人店を装った大資本傘下の飲食店ばかり並ぶ街、といったところではないだろうか。上京して店を出したい田舎者に払える賃貸料ではない。近隣のマンションに入居できる人も金持ちに限られる。整備された公園のベンチにはホームレスが寝転べないように「排除アート」が設置されることも容易に予想できる。東京には金持ちが住むべきで貧乏人は「人返しの法」でよい、と考えるならそれでもいいだろう。

　筆者はかつてJR系デベロッパーによる阿佐ヶ谷の再開発の模様を眺めていたが、無残に失敗した阿佐ヶ谷アニメストリート、チェーン系の店舗がめまぐるしく入れ替わり定着しないテナントを見て、「上からの」計画の功罪を考えるようになった。一方、隣の高円寺では再開発反対の運動があり、「やっぱり高円寺に再開発は要らないパレード」といったデモが行われている。筆者は、この界隈の人々がかつてやっていた放置自転車撤去反対の運動には懐疑的だった。たとえば救急車が通れない道路は明らかに問題があるし、災害や事故が起きて被害が出ればそれはそれで行政を非難するだろう。再開発に抗う彼らを「愚民」あつかいして無視することはたやすい。

しかし、再開発には防災、安全の抗いがたいお題目が必ずつけられてきたことも事実である。とりあえず防災と安全で突破を図り続けた結果、いっそのこと最初から聞く耳を持たない、代案も用意する気がない、という人々が一定程度出現してもそれほど不思議はない。

都市計画家が考える理想の東京と、田舎者・独身者・貧乏人が住んで楽しい東京には大きな乖離がある。「安全で住みやすくてつまらない東京」ではなく、「危険で住みにくくて面白い東京」が好きな人も多いのである。科学的で合理的な帝都復興や都市計画を賞賛する人々には、どうも東京各地の代替不可能な魅力を軽視する傾向があるように見えた。

前出の北原氏の著作は、東日本大震災の復興に参画した専門家の総括を紹介している。たとえば、想定浸水高をシミュレーションして防潮堤を造り、まちづくりに反映できた一方で、その高い防潮堤は美しい地域の景観を阻害することとなった。安全性が重視されるあまり、「地域が有する固有の資源」が生かせないという困難もあった。このようなことは、東京にもあてはまるのではないだろうか。戦災復興時にすぐれたヴィジョンを示した都市計画家として武村氏が紹介する石川栄耀は、広場や盛り場に着目し、「民主的な町」「文化的な町」「健康な都市」などに加え、「仲のよい都市」そして「楽しい都市」を目指した。首都直下地震が避けられないとしても、現代の東京住民の多様な「楽しさ」が忘れ去られない防災とまちづくりであることを願う。

関東大震災を捉える視野は広がり、思考は深まっている、と述べた。そのことは意外と見えにくいかもしれない。政治史、メディア史、警察史、軍事社会史、民衆史などのさまざまな領域で、かなり長く設定された時間の中に震災を位置づけなおした研究が多いからである。

たとえば、礼賛に傾きがちな後藤新平と帝都復興院の再評価については筒井清忠氏の『帝都復興の時代』があり、震災後の後藤の政治的なふるまいと失墜、のちの復興局疑獄事件などが政治史の中に位置づけられている。近年刊行された筒井氏編の『大正史講義』でも一章が割かれ、震災後の政治過程の焦点は復興問題ばかりでなく普通選挙問題と新党問題にあったこと、後藤らが反政友会工作を進めつつ冒険的に新党形成を策したこと、後藤

の側から帝都復興審議会の政治的利用をしかけたが根回しを欠き、反転攻勢を招く結果になってしまったことなどが描かれた。教訓として、後藤のような政治家に対する「メシア待望的姿勢」への警鐘と、非常時のリーダーの権限を平時に明確に規定しておく必要性が論じられていることも印象的である。

関東大震災における朝鮮人、中国人、社会主義者らの虐殺は、「朝鮮人が放火している」「井戸に毒を投げ込んでいる」といったデマが発端となった。佐藤卓己氏の『流言のメディア史』は、SNS全盛の現在とAI時代の近未来を終点とする歴史の中に、震災時の流言を位置づける。地震発生からしばらくの間、東京の新聞はほぼ機能停止となった。したがって「朝鮮人来襲」の流言は、警察や軍隊などによって助長されてはいるが、基本的に民衆間の「くちコミ」で蔓延したと考えられる。民衆は単に情報の受け手ではなく、主体的に噂の内容を取捨選択し、説得的と思う情報を付け加えて他者に伝達する送り手でもある。放火、略奪、強姦など被災地の多様な流言が、朝鮮人を「外敵」と捉える民衆の認識(思い込み)を基盤として広がっていった。

また佐藤氏は、震災下でも機能していた地方新聞などによる「メディア流言」がラジオ放送の登場を加速させたことも指摘する。地方新聞は、治安当局による流言や虚報を含む無線通信の傍受に基づいて報道するが、傍受した内容をそのまま書くことは法律で禁じられているため、書き手の主観的なバイアスを盛り込んで記事を作る。この多重構造が虚構の「朝鮮人来襲」イメージを強化した反省に立って、いつでも直接国民に情報を伝えられるとされるラジオ放送の必要性が強く認識されるようになった。

佐藤氏がいうように、受け手がただちに送り手となるSNS時代は、「くちコミ」の流言が「メディア流言」となる時代である。その一方、「正しい」と思われがちな報道の歴史も、戦時中の大本営発表や占領期のGHQによる検閲と戦争認識の押しつけ、近年の放射能風評被害騒動にいたるまで、事実上「メディア流言」の歴史なのであった。「正しい情報」だけの伝達を求める姿勢にも、大きな危険がひそんでいる。佐藤氏は、「流言がある世界」こそが現実であり、その「あいまいさ」と向き合うことの意味を説いている。

関東大震災で起きた出来事のうち、最も一般的な関心を集めるのはやはり朝鮮人に対する虐殺と迫害である。多くの研究者がいうように、歴史学における震災への関心は長年虐殺事件に集中してきた。近年でも古典的作品といえる姜徳相の『関東大震災』が復刻されたほか、山田昭次氏の諸著作など、関連書籍は多数にのぼる。二〇二三年九月一日には、森達也監督による映画『福田村事件』が公開される。この映画は、香川の被差別部落から来た薬の行商人一五人が千葉県の福田村で朝鮮人と誤認され、うち妊婦、幼児を含む九人が虐殺された史実を題材としている。映画の企画協力にも名を連ねる辻野弥生氏は事件の真相究明に取り組み続けており、映画の元となった著書『福田村事件』も今年復刊された。

虐殺問題に関してはさまざまなアプローチがありうるが、加害者である警察、軍隊、そして民衆にとっての近現代を再考することで戦後歴史学の図式を乗り越えようとする研究が出ている。宮地忠彦氏の『震災と治安秩序構想』は、警察改革と「朝鮮人問題」の変遷を追う。大正デモクラシーの時代状況は、明治以来の威圧的な警察のあり方を反省し、懇切丁寧な説諭などを通して大衆を「善導」する警察を目指す動きをもたらした。一方、震災前にはコミュニケーションのずれや賃金問題などから内地在留の朝鮮人労働者と日本人労働者の争闘が激化し、メディアの朝鮮人描写も否定的なものになっていた。日朝の労働者の「善導」は困難となり、事件の下地ができていく。震災下の警察は地震発生直後にデマに基づいて自警行為を促す失策を犯し、その後も指導や制止に従わない自警団の暴走に苦慮した。「善導」主義の限界は露呈されたのである。以後の警察政策は厳罰主義的な治安維持法の方向へと進んでいく。

吉田律人氏の『軍隊の対内的機能と関東大震災』は、これまで不十分であった軍隊の国内治安維持機能の体系的分析に挑み、その中に震災を位置づけた書といえる。「想定外」の大災害の中、陸軍側にも用意がないまま迎えた戒厳令適用の重さと「朝鮮人暴動」のデマは被災地に混乱をもたらし、展開する部隊に波及して惨事が引き起こされた。しかし、人命や財産の保護に尽力した軍隊の役割も大きくクローズアップされ、駐屯部隊のなかった横浜では震災後に連隊誘致運動まで起こった。軍隊は、虐殺に関与するとともに「最終的な治安維持装置」とし

ての機能が託される存在でもあった。

宮地氏と吉田氏の研究は、従来だと絶対悪として描写されることが多かった警察と軍隊の多面性に着目している。内在的な論理を踏まえた組織とその行動の理解は、虐殺事件の真相究明に資することはあっても妨げることはないように思われる。その一方、在特会などの排外主義運動への対抗の中で生まれた加藤直樹氏の『九月、東京の路上で』が説くように、「共感」もまた重要な要素である。一人一人の朝鮮人が日本内地にやってきた理由、そしてそこで無惨に殺された経緯への想像力といってもいいかもしれない。昨年日本語版が刊行された『飴売り具學永（クー・ハギョン）』は、埼玉県寄居で自警団に惨殺された朝鮮人青年の短い物語である。作者の韓国人牧師キム・ジョンス氏の抑制の効いた筆致で描かれる具學永と盲人按摩師菊次郎の友情、そしてその顛末は、「共感」の意味を強く問いかける力を持つ。

虐殺、暴行した側の日本人民衆にも新たな光があてられている。近代日本で発生した暴動の歴史を通して、民衆に内在する虐殺の論理に迫った藤野裕子氏の『都市と暴動の民衆史』『民衆暴力』は話題を呼んだ。民衆は朝鮮人を虐殺しつつも警察署襲撃などで権力に激しく反抗した。裁判記録や過去の研究が収集した史料を分析する藤野氏は、震災下で噴き出した朝鮮人蔑視や敵意、国家に貢献する誇り、殺人への好奇心、復讐されることへの不安など民衆心理の多様な側面を活写する。興味深いのは、自警団を構成する男性労働者の世界で形成されていた「男らしさ」の価値体系に着目したことである。努力しても社会的上昇が望めない労働者は、腕っ節、豪快さ、弱い者を助ける義侠心などの「男らしさ」の価値を独自に発達させた。朝鮮人を殺しつつも避難民を精一杯救護し、時に別の朝鮮人は保護するといった、一見すると矛盾する姿を見せる民衆を理解する上で説得力がある。

関東大震災をはじめとする震災の記憶について、冒頭でかなり悲観的な書き方をした。要するに、喉元すぎれば熱さを忘れる、メディアによるメッセージの提示が定型化している、そもそも重苦しい気分に襲われて気が滅入る、などの理由により、震災の話はすでに食わず嫌いの域に達しているのではないか、という疑問が根本にはある。だが、押しつけられるからこそ拒絶反応が生まれ

る、ともいえる。押しつけられることもなくなれば、なかったことにされてしまうかもしれない。

そのことを災害の記憶をめぐる大きな枠組の中で論じたのは、メディア史研究者水出幸輝氏の『〈災後〉の記憶史』である。現在形で語られる関東大震災の復興物語は一九三〇年の帝都復興祭で終わり、そこから過去形の「記憶語り」の時代に入ったと水出氏はいう。九月一日の「震災記念日」は防空・防災の備えと東京での慰霊が同居する日となり、一九三九年九月一日に始められた「興亜奉公日」によって戦時体制へと動員され、敗戦を経て忘却の時代を迎える。九月一日が記憶の日として再構築されるのは、伊勢湾台風後の一九六〇年、「防災の日」に定められて以降だという。この日は台風の厄日「二百十日」でもある。だがやがて、地震予知への期待の高まり(と不可能性)が地震への不安を強くかき立てる一方、コースが予測可能になった台風への関心は後景化していった。九月一日は、もっぱら関東大震災のナショナルな記憶の日として位置づけられ、周年報道が繰り返されるようになる。大きな災害が何度も起こり、重層的に「災後」が積み重なる中で、記憶の「語りの形式」が定着、別ないい方では「形骸化」していった過程が描かれている。

では、「形骸化」しない生きたメッセージとして関東大震災の経験を提示することは可能だろうか。本稿で取り上げた作品群が震災にあてた新しい光は、多くの人の知的好奇心を強く刺激する可能性を持っていると考える。早い話が、面白いのである。たとえ陰惨な事実であっても、好奇心が喚起できなければ人間にそれを見続けることを強制できないということも、残念ながら事実ではないだろうか。

尾原 宏之(おはら ひろゆき)
一九七三年生。早稲田大学政治経済学部政治学科卒業、東京都立大学大学院社会科学研究科政治学専攻博士課程単位取得退学。博士(政治学)。専門は日本政治思想史。現在、甲南大学法学部教授。著書『大正大震災――忘却された断層』(白水社、二〇一二年)、『軍事と公論――明治元老院の政治思想』(慶應義塾大学出版会、二〇一三年)、『娯楽番組を創った男――丸山鐵雄と〈サラリーマン表現者〉の誕生』(白水社、二〇一六年)など。

15分で読む　関東大震災100年　ブックガイド

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
筑摩書房	4480093905	流言蜚語	清水幾太郎	1100	2011
講談社	4062920575	天災と国防	寺田寅彦	780	2011
角川ソフィア文庫	4044094393	天災と日本人――寺田寅彦随筆選	寺田寅彦著、山折哲雄編	476	2011
中公新書	4122055117	地震雑感／津浪と人間――寺田寅彦随筆選集	寺田寅彦著、千葉俊二・細川光洋編	600	2011
河出文庫	4309411002	東京震災記	田山花袋	品切	2011
ちくま学芸文庫	4480095671	震災画報	宮武外骨	1100	2013
講談社文芸文庫	4062901925	大東京繁昌記　下町篇	講談社文芸文庫編	品切	2013
講談社文芸文庫	4062901956	大東京繁昌記　山手篇	講談社文芸文庫編	品切	2013
講談社学術文庫	4062923811	関東大震災――消防・医療・ボランティアから検証する	鈴木淳	品切	2016
ちくま文庫	4480438942	関東大震災と鉄道――「今」へと続く記憶をたどる	内田宗治	950	2023
中公選書	4121101389	関東大震災がつくった東京――首都直下地震へどう備えるか	武村雅之	1800	2023
藤原書店	4865783766	震災復興はどう引き継がれたか――関東大震災・昭和三陸津波・東日本大震災	北原糸子	5300	2023
中公文庫	4122064232	帝都復興の時代――関東大震災以後	筒井清忠	品切	2017
ちくま新書	4480074164	大正史講義	筒井清忠編	1300	2021
岩波新書	4004317647	流言のメディア史	佐藤卓己	900	2019
五月書房新社	4909542557	福田村事件――関東大震災・知られざる悲劇	辻野弥生	2000	2023
新幹社選書	4884001377	関東大震災（新装版）	姜徳相	1500	2020
論創社	4846014858	関東大震災と朝鮮人虐殺	姜徳相・山田昭次・張世胤・徐鍾珍ほか著	3800	2016
創史社	4915970450	関東大震災時の朝鮮人迫害――全国各地での流言と朝鮮人虐待	山田昭次	2200	2014
創史社	4915970382	関東大震災時の朝鮮人虐殺とその後――虐殺の国家責任と民衆責任	山田昭次	2200	2011

出版社	ISBN（978）	書名	著者名	本体価格	刊行
クレイン	4906681365	震災と治安秩序構想――大正デモクラシー期の「善導」主義をめぐって	宮地忠彦	品切	2012
日本経済評論社	4818824072	軍隊の対内的機能と関東大震災――明治・大正期の災害出動	吉田律人	6500	2016
ころから	4907239053	九月、東京の路上で――1923年関東大震災　ジェノサイドの残響	加藤直樹	1800	2014
展望社	4885464164	飴売り具學永（ク・ハギョン）――関東大震災で虐殺された一朝鮮人青年の物語	キム・ジョンス、ハン・ジヨン絵、山下俊雄ほか訳	1500	2022
有志舎	4903426983	都市と暴動の民衆史――東京・1905－1923年	藤野裕子	3600	2015
中公新書	4121026057	民衆暴力―― 一揆・暴動・虐殺の日本近代	藤野裕子	820	2020
人文書院	4409241264	〈災後〉の記憶史――メディアにみる関東大震災・伊勢湾台風	水出幸輝	4500	2019
文春文庫	4167169411	関東大震災（新装版）	吉村昭	670	2004
青土社	4791768004	関東大震災の想像力――災害と復興の視覚文化論	ジェニファー・ワイゼンフェルド著、篠儀直子訳	6300	2014
三弥井書店	4838234042	震災を語り継ぐ――関東大震災の記録と東日本大震災の記憶	石井正己	2800	2023
現代書館	4768458860	関東大震災　朝鮮人虐殺の記録――東京地区別1100の証言（普及版）	西崎雅夫編著	2500	2020
吉川弘文館	4642755627	関東大震災と戒厳令	松尾章一	2300*	2019
岩波文庫	4003316016	地震・憲兵・火事・巡査	山崎今朝弥著、森長英三郎編	900	1982

* オンデマンド版

紀伊國屋書店新宿本店アカデミック・ラウンジについて

後藤 崇（紀伊國屋書店営業総本部 教科書・BC事業推進本部）

紀伊國屋書店新宿本店の3階に「アカデミック・ラウンジ」がオープンし、約20坪のスペースには外商カウンター、イベント用のテーブルと椅子、大型モニターがあり、フェア用の棚があって、学術書に絡んでのフェアやイベントを行っている。通常のイベントスペースよりも講師と参加者の距離が近く、立ち見での当日参加も可能なので、会場に一体感が醸成され易い。質問のし易さの点で、専門性の高いトークイベントを開催するにはうってつけの会場だと思う。

アカデミックという言葉についてだが、先般、東京ステーションギャラリーで開催された佐伯祐三展では、佐伯がフランス・パリでの最初の修行時代、私淑するモーリス・ド・ヴラマンクに自らの絵を見せたところ、「アカデミック！」と罵倒され、ここから独自性を求めて新しい表現の模索に突き進んだことが説明されていた。勿論、アカデミック・ラウンジのアカデミック（academic）の意味はこの場合、「学究的な」であって、ヴラマンク指すところの「伝統的・格式的」でないが、紀伊國屋書店新宿本店アカデミック・ラウンジは、古典的なテーマを含めて学術的なあれこれの、新しい一面を紹介するということにその役割があって、できればラウンジの内容に

斬新さというものを出していけたらいいなとも思っている。

アカデミック・ラウンジで扱われる様々なテーマについては、主としてある特定の著作を通して提示されることになるが、それについては常に思うことがある。まず第一に、著作することは並大抵ではない。私は学生時代、研究テーマを選択するにあたっては大きな山に挑まねばいけない、と言われた。大きな山とは多くの著名な研究者が取り組んだ対象という意味で、学生もまたこれに挑み、先人研究者の思考の軌跡を十分に辿る必要がある、ということだった。全て研究は、あまたの優れた調査・研究を土台として、新しい発想や視点を得る。

学術研究は、とある事柄について、これまでの研究の軌跡を辿り、現在に当て嵌めて解釈をし直し、更に考えを一歩進め、或いは新しい発見を加えて、将来に思考の多様化や具体化の可能性を開こうとするもので、学術書に正対する時、読み手もまた研究者の思考の軌跡を追体験する。

そうして、本屋の店頭は新刊の山である。本屋に就職した当初は本当にびっくりした。毎日こんなに新刊が出るとは思っていなかった。学術書も毎月たくさん発売される。本質的な新知見についての本の他、周辺的な解説や分析の本がたくさん出る。古典を含めて原典というものは、そのままでは一般にはなかなか理解が難しいので、説明本が必要になるし、テーマの多様さを思えば、そうした出版状況になる。この多種多様な新刊を前にして、これを全て把握する個人はあり得ないこと、そうしてその全貌の知れない世界には、過去から未来に亘って、実に様々な切り口があるということを、改めて思わされる。

斯様に広大な学術の世界において、知は細分化・専門化されていて、総合知として纏めることが難しくなり、それが一般の理解を阻んでいることも多い。そうして研究者の著した書籍は、説明本であっても尚、一般の人には理解することが難しい場合がある。しかしながら、日々起こる出来事について、TVでは専門家が解説を行っている。現代では学問的リテラシーの必要性がますます高まっている状況に思える。原発事故やコロナ報道でも、専門家は一般に容易に説明ができる言説を持っていなかったように思えたし、また、専門家以外の人は素養の不足から、冷静な批判精神を保ってこれらの説明を聞くことができないといった反応が窺えた。やはり現代社会で生きるためには、科学的・学問的な素養を身につける必要があるように思える。また、日本の文化として、学術をカジュアルに読書という行為の中で受け入れていく土壌があると、何かの本で読んだことがあって、それを支える出版文化がある、という意味でこれを捉えた記憶がある。しかし昨今、社会の一層の複雑化に対して、読書離れと対象となる事象の多さ故に、個々の問題については表層的な理解に留まる傾向が強まっているとも感じる。

学術書に関して、その本との出会いは知識との出会いであり、研究者その人との出会いでもある。そうしてアカデミック・ラウンジは、この、人から語られる知との出会いを演出する場でもある。その為、トークイベントでは著作について、著者自ら語っていただくことにしているが、その際、一般の方に向けて平易な言葉で説明していただくことが大切なポイントだ。実際の参加者には学生や生徒、場合によってはこどももいるので、話者は参加者目線に合わせていくこ

とになり、自然と容易な説明に向けて、平易な言葉を選択していくことになる。勿論、専門的な事柄については、その前提としての基礎教養的なところから説明が必要となる場合もある。結果、トークイベントは予定の時間を大きく超えてしまうこともしばしばだ。平易な言葉で語るということは、却って難しく、文字通り言葉を尽くさなくてはならないのだと知らされるが、演者の語りは熱を帯び、まだまだ話足りないといった言葉を頂く。これは熱心に聞き入る一般の方を前にしての、学者先生の素晴らしい科学反応で、見ていてとても嬉しい。

こうした流れをイベントの中で作るため、著者1名の講演形式ではなく、編集者との対談形式を採ることもある。編集者は著者の言わんとするところの理解に、多大な努力を払っている筈であり、また、著書の全体構成とその意味をよく分かっていると思うからである。書籍には解説者による説明が、あとがきのような形で付されていることがあるが、この場合にも一般参加者と著者の間に立って、一般の理解を助けるために、著者に対して質問という形で概略や詳細の説明を促す役割を担っていただく結果となることが多い。言い換えを行うことで、難解な専門用語についての理解を助けてもいる。ここには個人的に編集者という方々への興味があり、著者との対談の中で、上梓した本への想いを語っていただきたいという思惑もある。

最後に新宿本店長、星から版元様や著者様へのお願いです。

「興味というものが偶然の出会いからもたらされることは少なくありません。だから、アカデミック・ラウンジには学術を巡る本に携わる、様々な人に登壇いただきたい。そうして、今日た

またまそこにその本があった、そこにその本について語る人がいた、という偶然の機会に於いて、優れた知見が平易な言葉で熱意をもって披露され、これに触れた誰かの新たな興味への扉を開いて欲しいと期待しています。一般の方に向けて少し難しいが優れたこの本を平易に説明したい、という版元様や著者の方のお申し出をお待ちしております。少しでもお役に立てればと思います。」

著者近影

後藤 崇（ごとう たかし）

新宿本店アカデミック・ラウンジ　イベント実施実績

日時	イベント名	対象書籍
【2022年】		
11月12日（土）	新宿区立中央図書館50周年記念ライブイベント（Zoom使用）	
11月16日（水）	和田裕美さんミニトーク&名刺交換サイン会	『ファンに愛され、売れ続ける秘訣』（かんき出版）
11月19日（土）	新宿区立中央図書館紹介イベント（Zoom使用）	
11月25日（金）	LibrariE&情報館に関するセミナー（オンライン配信）	
12月1日　（木）	小原雅博先生トークイベント	『戦争と平和の国際政治』（筑摩書房）
12月7日　（水）	鈴木祐さんミニトーク&サイン会	『YOUR TIME ユア・タイム』（河出書房新社）
12月10日（土）	東京農大マンスリー講演・第1回「きのこのすばらしき世界」（学長 江口文陽先生）	
12月16日（金）	「アクチュアル」PRイベント（オンライン配信）	大修館書店オンライン型探究教材「アクチュアル」
12月19日（月）	ジャパンナレッジSchool 地図ソフト体験会（筑波大学附属駒場中・高校）	
【2023年】		
1月20日　（金）	「人類学カフェ」トークイベント（篠原徹先生ほか3名）	『生態人類学は挑む』（全16巻、京都大学学術出版会）
1月22日　（日）	安積遊歩さん×荒井裕樹さんトークイベント	『このからだが平和をつくる』（大月書店）
1月28日　（土）	東京農大マンスリー講演・第2回「発酵の知らないおはなし」（前橋健二先生）	
1月29日　（日）	『経営学の危機』と大学の危機（佐藤郁哉先生）	『経営学の危機』（白桃書房）
2月3日　（金）	姜尚中先生トーク&サイン会	『アジア人物史 第1巻 神話世界と古代帝国』（集英社）
2月11日　（祝）	藤枝理子さんトーク&サイン会	『仕事と人生に効く教養としての紅茶』（PHP研究所）
2月15日　（水）	林真理子さん 公式YouTubeチャンネル収録	
2月17日　（金）	轡田紗世さん×中村稔彦さんトークイベント	『田んぼの中のコーヒー豆屋』（新評論）
2月18日　（土）	ジャパンナレッジSchool「先生のための統計活用セミナー―中高生の授業で役立つ統計―」ハイブリッド	
2月22日　（水）	『学問のすゝめ』刊行150周年記念トークイベント『学問のすゝめ』はこんなに面白い!!』（慶應義塾福澤研究センター都倉武之先生）	
2月24日　（金）	森山至貴さんトークイベント	『10代から知っておきたい女性を閉じこめる「ずるい言葉」』（WAVE出版）
2月25日　（土）	SAKURACOさんトーク&サイン会	『SAKURACO's こなれ英語LESSON』（ベレ出版）

日時	イベント名	対象書籍
2月26日（日）	東京農大マンスリー講演・第3回「知られざるホタテガイの魅力」（副学長 千葉晋先生）	
2月27日（月）	幅允孝さんトークイベント	『差し出し方の教室』（弘文堂）
3月3日（金）	スサンナ・ペルテッソンさんトークイベント	『ノニーン！ 幸せ気分はフィンランド流』（ネコ・パブリッシング）
3月10日（金）	今尾恵介さんトークイベント	『日本鉄道大地図館』（小学館）
3月11日（土）	稲田俊輔さんトークイベント（エスビー食品主催）	『ミニマル料理』（柴田書店）
3月15日（水）	ベンジャミン・ボアズさん×カン・ハンナさんトークイベント	『日本はクール？』『コンテンツ・ボーダーレス』（クロスメディア・パブリッシング）
3月17日（金）	田口幹人さんトークイベント	『本屋、地元に生きる』（KADOKAWA）
3月18日（土）	横山北斗さんトークイベント	『15歳からの社会保障』（日本評論社）
3月24日（金）	板垣淳司さん「メッチャ楽しい会計入門」、中亭哲也さん「しあわせ学習法9フレーム」（大原学園イベント）	
3月25日（土）	東京農大マンスリー講演・第4回「ペピーノの魅力を大公開!!」（高畑健先生）	
3月26日（日）	辻直美さんトーク&サイン会	『地震・台風時に動けるガイド』（Gakken（メディカル・ケア・サービス））
3月30日（木）	見野さくらさん（柏書房営業部）トークイベント「出版営業って何!? から始まった私が3年目を前に今感じていることと、これから挑戦していきたいこと」	
4月5日（水）	紀伊國屋書店×光文社新書ビジネス講座（小林祐児さん）	『リスキリングは経営課題』（光文社）
4月20日（木）	露木恵美子さんトーク&サイン会	『共に働くことの意味を問い直す』（白桃書房）
4月21日（金）	成城大学連続講座 世界に誇る日本の〈本〉第1回 巻物（巻子本）から綴じ本（冊子本）へ―古代―（上野英二先生）	
4月22日（土）	瀬名秀明さん×渡辺政隆さんトーク&サイン会	『知の統合は可能か』（時事通信出版局）
4月23日（日）	リーマンサット・プロジェクトによるトークイベント	『#趣味で作る人工衛星』（オーム社）
4月25日（火）	「アフターコロナを見据えた探究学習を考える会」ワークショップ（田口哲男先生）	
5月6日（土）	夏葉社 島田潤一郎さんトークイベント	『電車のなかで本を読む』（青春出版社）
5月12日（金）	紀伊國屋書店×光文社新書ビジネス講座（今井伸さん）	『射精道』（光文社）
5月14日（日）	三上真史さんトーク&サイン会	『三上真史の趣味の園芸のはじめかた』（NHK出版）
5月19日（金）	成城大学連続講座 世界に誇る日本の〈本〉第2回 巻子本と冊子本―中世―（山田尚子先生）	

企画展示と図書館
――展示を通した司書の人材育成

河合　郁子（石川県立図書館　利用推進課　企画事業グループ）

1　石川県立図書館の企画展示コーナー

石川県立図書館（以下、「当館」）は、「思いもよらない本との出会いや体験によって、自分の人生の一ページをめくることができる場所」をコンセプトに掲げ、二〇二二年七月に移転開館しました。地上四階、地下一階、開架資料三〇万冊、五〇〇の閲覧席を設けたほか、本以外でも「体験」を提供する場として、一四〇人収容可能な「だんだん広場」や「研修室」、キッチンを備えた「食文化体験スペース」や3Dプリンタなどを備えた「モノづくり体験スペース」、さらにカフェも併設しています。開館して約一年で来館者は一〇〇万人を突破し、県内外から多くの方に注目いただいています。

当館の企画展示コーナーは、四階まで吹き抜けた円形閲覧空間の中心に位置しており、公共図書館としてはかなり規模の大きい展示空間です。これまでに開催してきた四つの企画展を簡単にご紹介します。

2　「絵本でたどる、ながいながい進化のはなし」（二〇二二年夏）

開館特別展として開催された標題の展示（以下、「進化のはなし展」）では、絵本のイラストを大きな絵巻風に仕

立てた壁面と、解説パネル、貸出用の図書、恐竜の全身骨格標本やアンモナイトの化石など博物資料を並べました。この展示は、二〇一九年に国立科学博物館（以下、「科博」）で行われた企画展「絵本でめぐる生命の旅」を当館の規模に合わせてカスタマイズするとともに、当館ならではのパートを追加して制作したものです。「絵本でめぐる生命の旅」の監修者である真鍋真・国立科学博物館副館長に、当館展示の全体の構成の相談にも乗っていただきました。実施にあたっては、科博で展示したときのデータを活用させていただきつつ、オリジナルパートの解説パネルの原稿は、担当司書が本を調べて執筆し、真鍋副館長にチェックしていただいて制作しました。展

写真1　開館特別展
「絵本でたどる、ながいながい進化のはなし」
photo（C）Hideki Ookura/Kurome Photo Studio

写真2　企画展「十二文豪図書館ニ降臨ス～EPISODE with 文豪とアルケミスト～」

示した標本類も科博から借用したものです。結果、「図書館に恐竜が！」「ミュージアムみたい！」「読みたい本が見つかった」など、子どもから大人まで多くの方に喜んでいただき、用意した図書の貸出回数は一五〇〇回を超え、大成功を収めました。

3　「十二文豪図書館ニ降臨ス」（二〇二二年冬）

二つ目は、人気ゲームとコラボした企画展「十二文豪図書館ニ降臨ス～EPISODE with 文豪とアルケミスト～」（以下、「文豪展」）です。ゲームに登場する十二人の文豪キャラクターの等身大パネルを設置し、その横には、文豪の交友録や人柄がにじむエピソードを紹介する解説パネル、そして文豪の作品や評伝などを並べました。また、ガラスケースでは、借用した文豪の直筆原稿や当館所蔵の文豪署名本を展示しました。ゲームに登場する図書館の雰囲気と、木材を豊富に使用した当館のシックな内装がよく似ているので、十二体のキャラクターパネルがずらりと並んだ様子は、展示タイトル通り、ゲームの世界から文豪たちがこの図書館に降臨したかのようで、

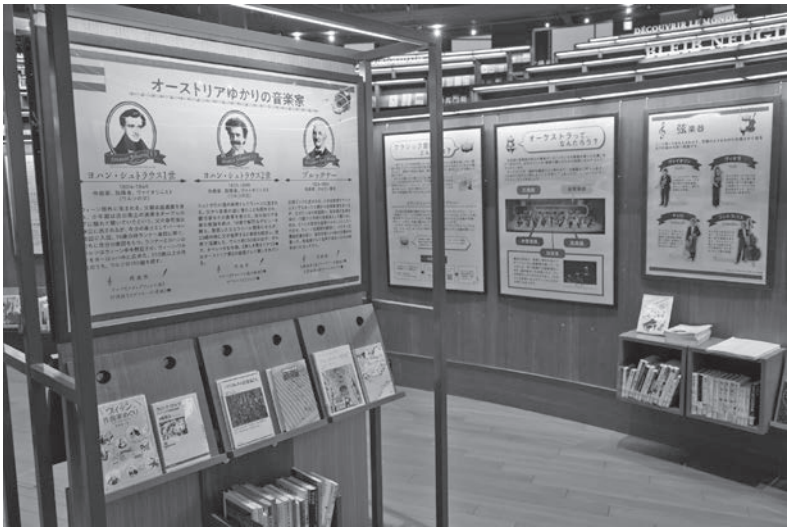


写真3　企画展「LIBRARY of music～音楽祭で楽しむ東欧とオーケストラの世界～」

SNSでも「素敵」「行きたい」と大いに話題となりました。

会期中には、石川県を代表する文豪、泉鏡花・徳田秋聲・室生犀星のキャラクタースタンプを用意し、三つ全て集めた方にオリジナルクリアファイルをプレゼントする来館促進イベントを行ったところ、スタンプ台紙二五〇〇枚が持ち帰られ、クリアファイルは一五〇〇枚を配布しました。

4　「LIBRARY of music」(二〇二三年春)

三つ目の企画展は、石川県で毎年五月に開催されている「いしかわ・金沢　風と緑の楽都音楽祭」(以下、「音楽祭」)を紹介する「LIBRARY of music～音楽祭で楽しむ東欧とオーケストラの世界～」(以下、「音楽祭展」)です。二〇二三年の音楽祭のテーマが東欧だったので、東欧の国々の文化・歴史やオーケストラの基礎知識、今年の音楽祭で演奏する楽団を紹介しました。民音音楽博物館から、東欧の楽器ツィムバロンやヨハン・シュトラウス二世など有名作曲家の自筆楽譜や書簡を借用して展示しま

写真4　特別展「鉄道タイムトラベル～2024年春、
いよいよ北陸新幹線県内全線開業！～」

した。また、館内で利用できるクラシックに特化した音楽配信サービス「ナクソス・ミュージック・ライブラリー」の案内を行い、サービス利用者は展示開始前と比較して約二倍となりました。

5　「鉄道タイムトラベル」（二〇二三年夏）

四つ目として、北陸新幹線が石川県の金沢から福井県の敦賀まで延伸することをPRする特別展「鉄道タイムトラベル～二〇二四年春、いよいよ北陸新幹線県内全線開業！～」（以下、「鉄道展」）を現在開催中です。明治以降、石川では鉄道が次々に整備され、人とモノとがつながることで地域が発展してきました。交通網の発達がもたらした産業の発展や暮らしの変化を、戦前の郷土資料や古写真とともに振り返るものです。京都鉄道博物館から特急・雷鳥のヘッドマークや模型を、西日本旅客鉄道から実際に使用された新幹線の車輪を借用して展示。おじいちゃん・おばあちゃんには昔を懐かしんだり子どもたちに昔語りをしていただき、子どもたちには北陸新幹線の車両模型と一緒に記念撮影をしていただきながら、

新幹線の延伸によって石川がどのように発展していくのか、ワクワクする未来を幅広い方々にイメージしてもらいたいと考えた企画です。

6　企画展示の実施体制

四つの企画展の共通点は、必ず他機関と連携していることです。一年間に三回、夏休み・冬休み・春休みを含む会期で展示を行っていますが、規模の大きい企画展を実施していくのは、図書館単独の力では至難の業です。そこで、連携先から原稿や画像素材を提供いただいたり、資料をお借りするなどの協力のもと展示を作っています。

各展示は、主に司書二名と取りまとめ係から成るチームで、一年ほどかけて準備が進められます。図書の制作に例えると、司書二名が著者で、取りまとめ係が編集者のような役割にあたります。司書は企画展ごとに異なる人選で、二年に一回くらいの頻度で企画展を担当することになります。その期間中は通常業務の担当量を部分的に減らして、展示に関する業務を行います。取りまとめ係は全ての企画展チームに加わり、全体のペースメイクやパネルなど展示物の制作進行、備品管理、次年度の計画や予算準備、広報などを担当します。過去の展示で蓄積されたノウハウを、各回の担当司書に伝える役割も担います。

また、どの企画展でも、期間中に展示テーマに関連するイベントを行っており、それらの企画や実施も各企画展チームが担当しています。

7　企画展が決まるまで

企画展の成り立ちには、司書立案型と外部発端型があります。

進化のはなし展と音楽祭展は、司書立案型の展示です。司書が提出した企画書について、具体性や実現の可能性を審査、ターゲットやテーマについては他の展示やイベントとのバランスを考慮して検討します。実施することになったら、企画者は担当司書としてチームに加わります。進化のはなし展は、二〇一九年に科博にて「絵本でめぐる生命の旅」を見た司書が、この展示を石川県民に見てもらいたい、と企画しました。音楽祭展は、吹奏楽

部員だった司書が、音楽祭をもっと盛り上げたい、と企画したものです。

文豪展と鉄道展は、外部に発端があった企画です。実施が決定した後で、テーマやターゲットに合わせて、担当の司書が選ばれました。文豪展は、ゲームの配信元であるDMM.comより、キャラクターパネルのディスプレイとスタンプを使った来館促進イベントの提案がありました。話を聞いた取りまとめ係が「ゲーム／文豪／図書館の組み合わせはとても相性が良いので、企画展に仕上げる方がイベントよりも効果が高い」と考え、展示企画が練られ始めました。ゲームファンに、キャラクターの隣に並んでいる文豪作品に手を伸ばしてもらえるかどうかは、解説パネルの面白さと一緒に並ぶ本のセレクトにかかっています。そこで、「文学」「中高生向けの本」を選書している司書が、企画展の担当となりました。

鉄道展は、北陸新幹線の石川県内全線開業に向けた機運醸成が目的の展示です。県の担当課から「たくさんの県民でにぎわっている図書館で展示をやりたい」と声がかかり、実施することになりました。あいにく当館の司書には鉄道マニアがいなかったので、鉄道好きの家族がいる司書が担当となりました。

8　企画展の目的

このような大規模な企画展の実施は、公共図書館では一般的ではありません。にもかかわらず、当館がわざわざ広いコーナーを設け、チーム体制を組んで、継続的に企画展を実施しているのはなぜなのか、疑問に思う方も多いのではないでしょうか。そこには三つの目的があります。

まずは、資料の活用(読書推進)です。タイトルや表紙が地味で手に取られにくいもの、普段は書庫にある古いものなど、来館者の視界に入りにくいけれど、ぜひ読んでもらいたい魅力的な本が、図書館にはたくさんあります。パネルを読んだりケースの実物資料を見たりして、「へえ、おもしろいな。もう少し詳しく知りたいな」と思った瞬間に手が届く場所に、本を配置できるのが展示という手法の特徴です。冒頭で紹介した当館のコンセプト「思いもよらない本との出会い」を具現する事業の一つとして、企画展が位置付けられています。

二つ目の目的は、新規利用者の開拓と来館促進です。図書館を利用するのは住民の三割程度と言われていますが、全ての県民の皆さんに一度は当館を訪れて、そしてリピーターになっていただきたいと考えています。「図書館には自分の読みたい本がない」「自分は本を読まないから図書館に行くことはない」と思っている方を、「本はさておき」展示を見たいから図書館に行こう」という気持ちに変えたい。例えば文豪展では、ゲームファンの「推し（お気に入りのゲームキャラクター）のパネル写真を撮る」ための来館を狙いました。展示だけでなく講演会などのイベントも、新規利用者の開拓に向いている手法ですが、展示は数か月間にわたって開催されるので、コストパフォーマンスが良いと言えるでしょう。

三つめの目的は、企画展の準備を通じた司書の人材育成です。展示を準備していくなかで、従来の司書の業務ではなかなかできないことを経験することができます。司書の視野を広げ、企画力・表現力・交渉力などのスキルを高めていくにあたり、ＯＪＴの機会として優れていると考えています。

9　各企画展の担当になった司書の仕事

企画展の担当となった司書は、まずテーマに合わせて展示のストーリーを考えていきます。ストーリー案やネタを持ち寄り、チームで検討して構成を固めていきます。その際には、連携先は重要な要素です。ミュージアムと連携することが多いですが、どのような素材を持っているか、当館に提供してもらえるか、連携先候補となる館を視察して展示のネタを集めたり、協力の依頼を行ったりします。

ストーリーが決まったら、連携先から提供された原稿や素材の組み合わせを、空間に合わせて具体的に検討していきます。パネル用の素材が足りないところは、参考文献をもとに原稿の執筆も行います。パネルは、原稿執筆、図版選定、ファクトチェック、校正のステップを経て、制作されていきます。図版に使用するための画像掲載許可申請なども、担当の司書が行います。

同時に、ガラスケースなどで展示する実物資料を検討します。実物資料があると、ターゲットの関心をひきつ

けたり、展示内容の理解を深めたりすることができるので、毎回、必ず訴求力のある実物資料を展示しています。当館の所蔵資料を使用するほか、連携先から借用することもあります。

パネルの下には、関連するテーマの本を並べ、手に取ってもらえるようにします。新しい本や素敵な表紙の本は、パネルの下に置いておくだけで、手に取られ、借りられていきます。そのような本の隣に、「タイトルや表紙は地味だけど実は面白い本」「少し古いけれどテーマがぴったり合う本」「世の中にこんな本があるのだと知ってもらいたい本」などをさりげなく配置していくことで、来場者と本の出会いの幅を広げていくことを狙います。通常の図書館の分類では離れた複数の場所に置かれてしまう本を一か所に集めて、素敵なハーモニーを作り出すのは、司書のセレクトとバランスの妙。棚の奥で埋もれてしまった本にも、スポットライトを当てる作業です。

10 関連イベントにおける担当司書の仕事

当館ではどの企画展でも、期間中に展示テーマに関連するイベントを行っています。著名人を招聘し展示のPRを狙うもの、展示の中身をより深めていくもの、企画展示コーナーから館内の他の場所（モノづくり体験スペースやカフェなど）へ誘導するものなど、様々な目的・タイプ・対象者で企画・実施しています。例えば、進化のはなし展では、六つのイベントを行いました。

① ［トークイベント］恐竜博士・真鍋先生にきく、進化のはなし
② ［ワークショップ］目指せ！化石ハンター
③ ［映画上映会］おまえうまそうだな
④ ［ワークショップ］親子で作ろう！恐竜クッキー
⑤ ［ワークショップ］ビフォーアフター・恐竜のすがた
⑥ ［モノづくり体験スペースとの連動イベント］マコトサウルスのマグネット作り

これらの関連イベントを企画・実施するのも、担当司

書が中心となって行っており、イベント運営担当課の職員とコンビを組んで進めます。企画書、検討会議、講師ブッキング、会場確保、告知、申込受付、参加者への連絡、配布資料の準備、会場設営、当日の司会進行やインタビュアー役、アンケートの分析、効果測定、講師謝礼の支払い事務など一連の業務の全てに関わります。イベントの企画では、目的、ターゲット層、展示との相乗効果などを明確にする必要があるので、コンセプトを意識する力も育まれます。

11　モノづくり体験スペースとの連動プログラム

関連イベントとして毎回必ず実施しているのが、当館に設置されているメイカースペースである「モノづくり体験スペース」との連動企画です。モノづくり体験スペースには、UVプリンタ、レーザーカッター、3Dプリンタなどのデジタル工作機器が備えてあります。これらの機器は、データ作成および機器操作にあたり専門知識が必要なため、利用する人はまだまだ多くありません。そこで、企画展のテーマに合う内容で、かつデジタル機器を気軽に体験してもらえるようなプログラムを用意することで、企画展示コーナーからモノづくり体験スペースへと来館者を誘導し、モノづくり体験スペース新規利用者層の開拓を狙っています。

例えば、文豪展の「名著で作る和紙しおり」は、文豪の作品から自分の好きな一節を選んでパソコンに入力すると、レーザーカッターが和紙しおりにその言葉を刻み、オリジナルのしおりを作れる、という企画でした。展示期間中に五〇〇人近くの人がしおり作りを楽しみました。音楽祭展の「チケットホルダーを作ろう」は、自分がiPadで書いたイラストを、UVプリンタで印刷して、オリジナルのチケットホルダーを作るというものです。

ここでも、司書のOJTを意識しています。スペースの運営(来場者の対応や機器管理)自体は、外部に委託しており、通常の司書の業務とモノづくり体験スペースの間には、接点はありません。せっかく館に備えている新しい技術や道具を、図書館の内部に取り込んでいくには、司書自身が機器に触れ、専門スタッフに教えてもらいながらデジタルデータを作成し、制作したグッズを使って

写真5　企画展「LIBRARY of music」と連動したプログラム
「チケットホルダーを作ろう」

みる、という一連の流れを経験することが不可欠です。しかし、「使ってみてね！」と、漠然と声をかけるだけでは、モノづくり体験スペースを活用する機会は増えません。

そこで、企画展ごとに新しい連動プログラムを考案することにしました。展示の担当になった司書は自然と、機器の特性を知り、専門スタッフと仲良くなり、試作品を作る過程で自らも工作体験することになります。「機械は苦手」「どう使ったらいいか想像できない」と言っていた司書でも、楽しみながら向き合うことができるようになります。

12　さいごに

蔵書や情報はコンピューターで検索できるようになり、貸出や予約もシステムで省力化され、調べものにおいてはインターネットとＡＩが強力なアシスタントを務める時代となりました。図書館で働く司書には、膨大な蔵書をより利用してもらえるようなテーマ性のある棚づくりや、学芸員のような思考で主体的にサービスやプログ

ラムを企画・実施していくことが、ますます増えていくでしょう。

企画展と関連イベントの実施を通して、「コンセプトやターゲットを意識して企画する力」「伝わる文章を書くためのノウハウ（表現力）」「連携先やイベント講師などと調整する力（交渉力）」「所蔵資料や情報をキュレーション・編集する力」「デジタル工作機器に関する知識・経験」などを身に着けることができます。当館の企画展は、新しい図書館サービスを作っていく司書を養成するOJTとしての側面も持っているのです。

今後も多様な機関やコンテンツとコラボしながら、コストパフォーマンス良く魅力的な企画展を作っていくことで、新規利用者を開拓し、図書館の中に賑わいを創出しつつ、司書のスキルアップも目指していきます。

ミネルヴァ書房「論点」シリーズ

岡崎　麻優子（ミネルヴァ書房　編集部）

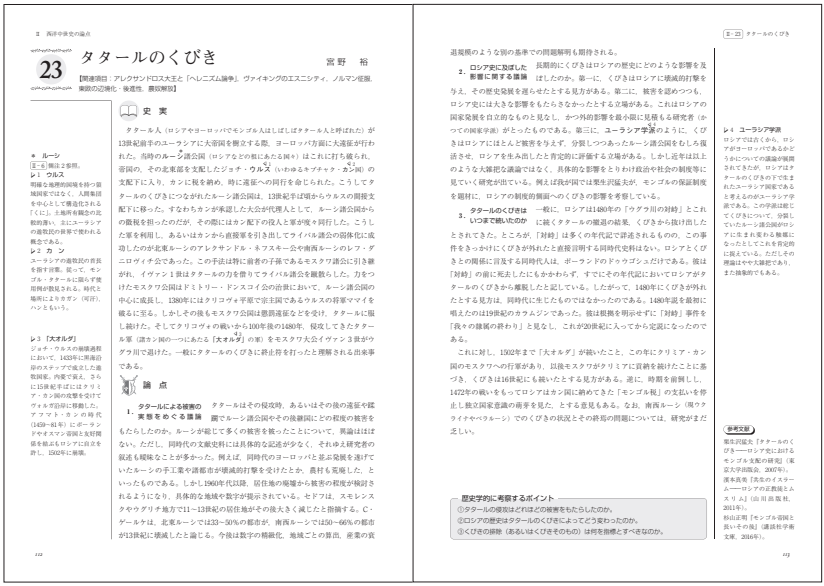
なぜ「論点」を集めた書物『論点・西洋史学』を作ったのか。その最大の理由は、「論点」に触れ、主体的に自ら思考に誘われることこそ、通俗的な「歴史物」では滅多に味わえない、そして、ネット検索では手軽に見つけることのできない、「歴史学」ならではの醍醐味だからです。

金澤周作監修『論点・西洋史学』「はじめに」より

二〇二〇年四月に刊行した『論点・西洋史学』は、西洋の過去に関して、真実＝「正解」を求めて幾通りもの「主張」が戦わされているポイント、すなわち「論点」だけを集めた、これまでの西洋史教科書とはひと味違う、おそらく類書のない書物です。

本書の考案者である金澤周作先生（京都大学教授）は、前任校、川村学園女子大学での西洋史演習で目にした学生たちの様子から、本書につながるアイデアが生まれたのだと「おわりに」で書いておられます。金澤先生があたためておられた、「『論点』だけで構成された西洋史本」というアイデアを、小社の好評シリーズである「やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ」の体裁をアレンジして具体化させる形で、「論点」企画が始まりました。

構成としては、西洋史を「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」の五パートに分け、それぞれの時代で二〇～三〇項目の「論点」を取り上げています。「ローマ帝国はなぜ滅んだか」や「近世礫岩国家とは」、「タタールの



『論点・西洋史学』の誌面

くびき」や「一七世紀の危機」等々、その数は全一三九項目に及びます。それらを、B5判という大きな判型を用いて、一項目あたり見開き二頁で解説、全項目この共通フォーマットで、〈史実〉〈論点〉〈歴史学的に考察するポイント〉と展開します。さらに、両端の側注欄では、他の項目との連携や語句説明、参考文献を紹介します。

金澤先生による巻頭言や、参考文献等の巻末付録も充実しており、大学生・大学院生はもちろん、関心の深い高校生や歴史愛好家などの一般読書人、中学・高校の先生方、関連・隣接領域の研究者まで、さまざまな読者を対象に、それぞれの境涯に応じてお読みいただけるつくりとなっています。

❖

『論点・西洋史学』の企画は、新型コロナウイルスの猛威に世界が直面するさなかに進行していました。

企画の始動は二〇一七年七月。総勢一二三名の執筆者に依頼した原稿がおおむね出揃い、監修・編者の先生方で丸一日がかりの編集会議を行ったのが、二〇一九年二月でした。その後、さらに追加分の原稿の集約や

書店員（書泉・芳林堂書店）の大内学さんの手書きPOPとともに（芳林堂書店高田馬場店）

調整を経て、印刷所で校正刷りの作成に着手したのが、二〇一九年九月、そこから数度の校正を経て無事に校了となり、二〇二〇年三月に見本が納品される頃には、私たちを取り巻く日常はすっかり変貌することとなりました。

新学期に照準を合わせて本が出来上がり、さあこれから、というときに、緊急事態宣言の発令とともに、大学ではキャンパスの入構禁止や、休校、オンライン授業への移行措置などが取られ、さらには大学生協も書店も、休業を余儀なくされました。先行きが見えない中、SNS等を通じての「こういう本が欲しかった」といったコメントや、執筆者による献本を受け取られた方からの「出版前からとても楽しみにしており、自分でも予約・購入しましたので、これで職場に一冊、自宅に一冊備えて、手放せない本となりそうです」とのお声、さらには多くの店舗が休業する中でも、自ら本書を購入し、自筆のPOPをつけて販売してくださった書店員さん（書泉・芳林堂書店の大内学さん）がいらっしゃるとの営業担当からの報告など、本書が多くの方に、驚きと喜びをもって受け止められていると励まされる思いでした。

「論点」シリーズ４冊が勢揃い！（ジュンク堂書店池袋本店）

コロナ禍の厳しい状況の中ではありましたが、本書は刊行後、多くの反響をいただくことができ、出来から間もないうちに二刷、三刷となり、二〇二二年一一月には七刷を数え、累計一万部を超えることとなりました。

❖

この『論点・西洋史学』の姉妹編としてその後、『論点・東洋史学』（二〇二二年一月）、『論点・日本史学』（二〇二二年八月）、『論点・ジェンダー史学』（二〇二三年六月）も刊行しました。いずれも項目数は『論点・西洋史学』以上か同等で、執筆者はそれぞれ一二〇～一五〇名ほど。実務面を振り返ると、ほぼ同時進行で、多くの先生方と原稿のお願いや調整、校正の依頼・返送・集約などの、多岐にわたるやり取りを重ねる日々でした。当時、金澤先生からは「いま日本で一番、（歴史学分野で）顔が広い編集者ではないですか（笑）」とのお声をいただいたことを覚えています。

『論点・日本史学』刊行の際は、相乗効果もあってか、既刊の「西洋史学」「東洋史学」にも、あらためて注目いただいた感があります。最新刊の『論点・ジェンダー

史学』は、歴史学だけでなく、文学、社会学、人類学、経済学、地域研究、芸術論など幅広い分野を視野に収めています。これを機に、さらに多くの方に、この「論点」シリーズを手に取っていただけることを願っています。

❖

本稿の冒頭に引用した、「はじめに」の原稿を読んだときの印象は、鮮烈でした。金澤先生の見事な文章もさることながら、そこに込められた歴史学の現在と未来を見据えた問題意識、読者を引き込む展開……。編集者は「最初の読者」として原稿に接しますが、なんとも言えぬゾクゾク・ワクワク感が味わえることもあり、あらゆる著者の文章を通じて、そのたびに新しい景色を見せていただける、幸せなお仕事だなと常々感じています。

これからも、その時々のニーズを汲み取り、著者と読者をつなぐ「場」としての良書を、心を込めてつくっていけたらと考えています。

この一冊で歴史観が変わる！

論点・ジェンダー史学

山口みどり／弓削尚子／後藤絵美／長志珠絵／石川照子編著　日本を含むアジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカを中心に、113の論点と36のコラムで歴史を読み解く。

＊B5判320頁　3520円

論点・西洋史学

金澤周作監修　藤井 崇／青谷秀紀／古谷大輔／坂本優一郎／小野沢 透編著

＊B5判340頁　3520円＊7刷

論点・東洋史学

アジア・アフリカへの問い158

吉澤誠一郎監修　石川博樹／太田 淳／太田信宏／小笠原弘幸／宮宅 潔／四日市康博編著

＊B5判378頁　3960円＊3刷

論点・日本史学

岩城卓二／上島 享／河西秀哉／塩出浩之／谷川 穣／告井幸男編著

＊B5判388頁　3960円＊4刷

ミネルヴァ書房

〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
TEL 075-581-0296　FAX 075-581-0589
価格税込 http://www.minervashobo.co.jp/

広報委員会

委員長　岩野忠昭

広報委員会の活動は、今期も前期と変わらず『人文会ニュース』の発行とウェブサイトの運営が二本柱になります。

ここ数年、『人文会ニュース』は年3回（8月、12月、4月）のスケジュールで発行し、前期も滞りなく発行できました。この数年の好評価を励みに、さらに充実した内容を揃えることを目指します。人文会の活動を広く知らせるという役割を基本として、書店や図書館の人文書担当の方に、少しでも興味を持っていただき、なおかつ日常の業務に役に立つようなコンテンツを提供していきたいと考えています。

ウェブサイト（http://www.jinbunkai.com/）は、人文会と会員各社の情報提供の場として引き続き内容の充実を図っていきます。運用を開始したTwitter（@jinbunkai）も軌道に乗り、ウェブサイトの記事がTwitterに投稿されるようになっています。

また前期は『人文書販売の手引き』の改訂作業をスタートしました。本来であれば5月の総会までに完成させるはずでしたが、少々遅れてしまいました。この夏のウェブ公開に向け作業を進めていますので、公開までいましばらくお待ちください。

今期も紙媒体とウェブ媒体、それぞれの特性を活かし、かつ補完し合いながら、人文会と人文書の普及、発展を目指しますので、何卒よろしくお願いいたします。

委員長　岩野忠昭（白水社）　三木　拓（法政大学出版局）
副委員長　乙子　智（慶應義塾大学出版会）　本橋弘行（ミネルヴァ書房）

調査・研修委員会

委員長　森　卓巳

本年度の委員会は、昨年同様に「使える研修」を柱に年間を通じて活動してまいりたいと考えています。コロナ禍によりリアルな活動が制限される3年間でしたが、その中でオンライン形式での研修が定着し、正担当者以外の幅広い会員社員の皆さまにも加わっていただくことができ、結果として昨年度は5つの研修会で延べ240名の方々にご参加いただきました。また大学出版部協会、心理学書販売研究会の皆さまとも合同で研修会を実施することができました。今年度も会員社内外の講師の方から学ぶ知識、経験を通して、学び合う風土を醸成し、会員社に有益な研修活動を実施してまいります。

また、2年間中止していた全国の書店・図書館などへの訪問も、昨秋再開し、会員社をグループ編成し全国の6地域へ訪問いたしました。コロナ禍で難しかった書店の方々との対面コミュニケーションや、地域の新聞社、図書館への訪問を通じて、この間の大きく変化したマーケット環境を肌で感じることができました。この訪問先を選定するのも小委員会の役割ですので、今秋の実施に向けて委員会内で熟議し提案いたします。

社会全体がウイズコロナの活動を模索する中で、弊会活動も以前とは異なる新しい活動を求められていると思います。この間で培った経験や知見も加え、販売・企画委員会、広報委員会と連携し、会員社にとって有益な委員会活動になるよう努めます。今年度もどうぞよろしくお願いいたします。

委員長　森　卓巳（青土社）　　束原亮佑（勁草書房）
副委員長　澤畑　塁（東京大学出版会）　　河内秀憲（筑摩書房）

委員会活動方針

販売・企画委員会

委員長　吉岡　聡

今期の販売・企画委員会は1社担当交代がありながらも、前期と同じ6名体制で活動していくこととなりました。

具体的な活動を紹介していくと、外商を含む書店様向け情報ツール「人文書ベストセレクション」(年3回)・「今月の一押しFAX」(月1回)・紙版「新刊案内パック」(月1回)・「高校生のためのブックガイド」(年1回)の4本立てで小会会員社の新刊・好調書情報を発信してまいります。

全国書店様でのブックフェアも随時開催してまいります。法人によっては、エリアの外商と連動くださる機会も増えてきております。

三省堂書店様との施策は小会活動の重要な柱へと成長を遂げております。各店での大小フェアに加え、主要店9店内好立地での常設棚「本の街 神田神保町発！ 人文書 自信のオススメ」施策は7月分からリニューアルし、更なる進化を模索してまいります。

紀伊國屋書店様との新施策も前期より開始し、前述の「高校生のためのブックガイド」を活用した店舗施策が始まりました。他にも学術和書部様と法人向けオンラインストアBookWeb Pro上でのプロモーション施策を実施中となります。

いよいよ図書館展示会の実地開催も従来規模へ復帰していくことが期待されます。関係各所と連携協力し、小会でも積極的に販売促進をしてまいります。

販売・企画委員会は、これまで得た経験と人脈を活かして、更に充実した活動を実施していく所存です。1年間ご指導ご鞭撻を賜りますよう何卒お願い申し上げます。

委員長　吉岡　聡(春秋社)
副委員長　段塚省吾(紀伊國屋書店)
佐藤信治(大月書店)
福士篤太郎(晶文社)
郡司恵太(誠信書房)
栗生圭子(平凡社)

●「高校生のためのブックガイド2023」発行
担当：段塚（紀伊國屋書店）、佐藤（大月書店）
17,000部　4月発行

●八重洲ブックセンター本店「未来へ良書をつなぐ　八重洲ブックセンター本店で売れた本　人文会のベストセラー」フェア
担当：販売・企画委員会　吉岡（春秋社）
期日：2023/3/2～3/31　357冊　662,300円

☆4月例会
期日：2023/4/21　15:00～17:00
場所：東京大学出版会会議室
欠席　筑摩書房
代理出席　青土社
1. 代表幹事より
2. 56回総会案内
3. 各委員会活動報告
4. その他

○人文会ニュースNo.143刊行
2023年4月発行（56頁、5,000部）
15分で読む：野原慎司氏（生誕300年目のアダム・スミス、東京大学大学院経済学研究科　准教授）
書店現場から：小谷輝之氏（葉々社）
図書館レポート：菊池壮一氏（日比谷図書文化館）
編集者が語る：内貴麻美氏（シリーズ「あいだで考える」創刊に寄せて、創元社）
2022年秋季グループ訪問報告（後編）

4. 来会：日本出版販売 仕入部パートナーズ営業課課長　山本憲司様
電子図書館コンテンツ提供について

☆2月例会
期日：2022/2/17　15:00～17:20
場所：筑摩書房会議室
1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他

●紀伊國屋書店新宿本店フェア
担当：販売・企画委員会　吉岡（春秋社）
期日：2022/11/10～2023/1/22　860冊　1,757,900円

●三省堂書店名古屋本店「第2回本の街神田神保町発！人文書フェアin名古屋」
担当：販売・企画委員会　郡司（誠信書房）
期日：2023/2/1～3/9　815冊　1,660,280円

○調査・研修委員会主催研修会
「無料でできる範囲の『身の丈』デジタルマーケティングを考える」
期日：2022/3/15　15:00～16:30　オンライン開催
講師：文藝春秋　大矢靖之様
参加者：会員社　43名

☆3月例会
期日：2023/3/17　15:00～17:30
場所：筑摩書房会議室
欠席　平凡社
1. 代表幹事より
2. 春期グループ訪問について
3. 各委員会活動報告
4. その他

☆臨時幹事会
期日：2023/4/11　16:00～17:00
場所：青土社会議室

本店　702冊　1,216,240円
朝倉ブックセンター　283冊　489,543円
期日：2022/8～2022/12
外商部　193冊　452,250円

●有隣堂ルミネ横浜店「人文(ジンブン)学のススメ」
担当：販売・企画委員会　吉岡(春秋社)
期日：2022/10/14～12/2　132冊・220,580円

○調査・研修委員会主催研修会
「PubteX　ショールーム見学会」(参加11社)
期日：2022/12/9　13:00～14:30
　　2022/12/13　15:00～16:30

☆12月例会
期日：2022/12/16　15:00～17:10
場所：筑摩書房会議室
　　オンライン参加　慶應義塾大学出版会
1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他　情報交換
4. 来会：日本出版販売 仕入部書籍仕入課係長　浅香健様、山下竜馬様
　Web仕入受付説明会

○人文会ニュースNo.142刊行
2022年12月発行(56頁、5,000部)
15分で読む：小笠原弘幸氏(滅亡100年　オスマン帝国の歴史、九州大学准教授)
書店現場から：西田今日子氏(東京ジャーミイ・ディヤーナト トルコ文化センター)
図書館レポート：八角聡仁氏(近畿大学中央図書館)
編集者が語る：吉田真美氏(「中学生の質問箱」シリーズ、平凡社)
2022年秋季グループ訪問報告(前編)

☆1月例会
期日：2023/1/20　15:00～17:20
場所：筑摩書房会議室
1. 代表幹事より
2. 各委員会活動報告
3. その他　情報交換

☆10月例会

期日：2022/10/21　15:00～17:30

場所：筑摩書房会議室

オンライン参加　平凡社

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. 秋季研修旅行報告
4. その他　情報交換
5. 来会：紀伊國屋書店 東京地区店売第一部長兼新宿本店長　星真一様
「新宿本店3階リニューアルオープンに関する説明」

○特約店グループ訪問

・10/12～14　京都・兵庫グループ：◎晶文社（福士）・青土社（森）・吉川弘文館（片山）
・10/12～14　岡山・広島・高知グループ：◎白水社（岩野）・創元社（水口）・ミネルヴァ書房（本橋）
・10/18～20　北海道・宮城グループ：◎大月書店（佐藤）・春秋社（吉岡）
・10/24～26　大阪グループ：◎東京大学出版会（澤畑）・紀伊國屋書店（段塚）・法政大学出版局（三木）
・11/2～4　静岡・愛知グループ：◎誠信書房（郡司）・みすず書房（片桐）・勁草書房（東原）
・11/9～11　福岡・熊本グループ：◎慶應義塾大学出版会（乙子）・筑摩書房（河内）・日本評論社（荻原）

（◎班長）

☆11月例会

期日：2022/11/18　15:00～16:35

場所：筑摩書房会議室

1. 代表幹事・幹事会より
2. 各委員会活動報告
3. その他　情報交換

○人文図書目録刊行会総会

期日：2022/11/18　16:35～17:10

場所：筑摩書房会議室

●金高堂書店　人文書フェア

担当：販売・企画委委員会　登尾（平凡社）

期日：2022/9/17～2022/11/20

3. 「人文書販売の手引き」改訂作業について
4. 秋季研修旅行について
5. 各委員会報告
6. その他

○人文会ニュースNo.141刊行
2022年8月発行（60頁、5,000部）
代表幹事挨拶
15分で読む：片岡一竹氏（いま読み返すフロイトの戦争論、早稲田大学大学院）
書店現場から：田原陽介氏（東方書店）
図書館レポート：吉本龍司氏（カーリル）
編集者が語る：上村和馬氏（世界を読み解く一冊の本、慶應義塾大学出版会）
総会報告、活動報告、委員会活動方針

○調査・研修委員会主催研修会
「トーハン en CONTACT 説明会」
期日：9月14日　15:00～16:30　オンライン開催
講師：トーハン 書籍部マネージャー　森慶太様、アシスタントマネージャー　福澤顕様
　　仕入統括部マネージャー　青木鉄郎様
参加者：62名（大学出版部協会会員含む）

☆9月例会
期日：2022/9/16　14:00～17:00
場所：筑摩書房会議室
　　オンライン参加　晶文社・法政大学出版局
1. 代表幹事・幹事会より
2. 秋季研修旅行について
3. 各委員会活動報告
4. その他
5. 来会：大学生協事業連合 勉学研究事業部 書籍商品課　辻谷寛太郎様
　「新刊配本提案聖堂　運用変更について」

○調査・研修委員会主催研修会（大学出版部協会との合同研修）
「社内DXの進め方」
期日：2022/10/7　15:00～16:30　オンライン開催
事例提供：慶應義塾大学出版会　安井元規
参加者：70名（大学出版部協会会員含む）

●有隣堂横浜駅西口ジョイナス店「新社会人・新生活に向けておすすめしたい教養書フェア」
担当：販売・企画委員会　吉岡（春秋社）
期日：2022/5/1～5/31　138冊　263,100円

●笠原書店岡谷本店3団体合同専門書フェア
担当：販売・企画委員会　郡司（誠信書房）
期日：2022/5/10～6/17　44冊　81,400円

●三省堂書店下北沢店「新社会人・新生活に向けておすすめしたい教養書フェア」
担当：販売・企画委員会　福士（晶文社）
期日：2022/3/31～6/26　271冊　486,130円

●楽天ブックスフェア「本気（マジ）で教養を身につける　by人文会」
担当：販売・企画委員会　登尾（平凡社）
期日：2022/6/1～6/30　1,467冊　2,476,720円

☆7月例会
期日：2022/7/15　14:30～17:30
場所：筑摩書房会議室
1. 代表幹事・幹事会より
2. 年会費について
3. 「人文書販売の手引き」改訂作業について
4. 各委員会報告
5. その他
6. 来会：紀伊國屋書店 専務取締役　大野繁治様
「紀伊國屋書店の取り組みのご紹介」

○「人文書販売の手引き」改訂作業 打ち合わせ会議
期日：2022/8/18　13:00～14:35
オンラインで実施

☆8月例会
期日：2022/8/19　14:00～17:20
場所：筑摩書房会議室
オンライン参加　大月書店・慶應義塾大学出版会・平凡社・法政大学出版局
欠席　晶文社
1. 代表幹事・幹事会より
2. 会費について

し、委員会の構成メンバーを選考。
以下の人事を決定。

9　2022年度の役員および各委員会メンバーの発表
・代表幹事　片桐 幹夫（みすず書房）
・会計幹事　片山 伸治（吉川弘文館）
・書記幹事　水口 大介（創元社）
・販売・企画委員会　◎吉岡 聡（春秋社）　○段塚 省吾（紀伊國屋書店）
佐藤 信治（大月書店）・福士 篤太郎（晶文社）・
郡司 恵太（誠信書房）・登尾 純一（平凡社）
・調査・研修委員会　◎森 卓巳（青土社）　○澤畑 塁（東京大学出版会）
束原 亮佑（勁草書房）・廣井 一茂（筑摩書房）・
荻原 弘和（日本評論社）
・広報委員会　◎岩野 忠昭（白水社）　○乙子 智（慶應義塾大学出版会）
三木 拓（法政大学出版局）・本橋 弘行（ミネルヴァ書房）
《◎委員長（幹事）　○副委員長》

10　三役と各委員長挨拶
11　事務連絡
17:00　終了

☆6月例会
期日：2022/6/17　15:00～17:00
場所：筑摩書房会議室
1. 代表幹事より
2. 会費改定について
3. 「人文書販売の手引き」改訂作業について
4. 各委員会報告
5. その他

○人文三目録発刊　担当：広報委員会・幹事会
2022–2023年版：2022年5月発行、9,400部（哲学・思想）・8,200部（心理）・7,800部（社会）
「哲学・思想図書総目録」特別寄稿 井上達夫氏（ロールズからロールズを救う）
「心理図書総目録」特別寄稿 小俣和一郎氏（精神医学の歴史と優生学）
「社会図書総目録」特別寄稿 北村紗衣氏（フェミニズムは何を意味していて、いつ始まって、いつまで続くのか？）
※今回発行分をもって休刊。

○特約店グループ訪問　中止

2022年度（2022.5～2023.4）人文会活動報告（全般）

書記　水口大介

☆第55回（2021年度）人文会総会

期日：2022/5/20　14:00～

場所：文化産業信用組合会議室

出席者：正担当者18名

14:00開始

総会の開催

1　代表幹事挨拶

2　総会議長選出

＊総会議長は慣例に従い前年度の書記幹事（水口）が務める。

3　2021年度活動報告

ア）会活動全般　（書記：水口）

イ）会計報告　　（会計：片山）

4　2021年度各委員会活動報告

ア）販売・企画委員会　（委員長：吉岡）

イ）調査・研修委員会　（委員長：森）

ウ）広報委員会　　（委員長：岩野）

5　会則の改廃

＊今回は変更の申請なし

6　退会・休会・入会について

＊今回は申請なし

7　担当者変更の報告

＊今回は変更の申請なし

8　役員の改選および各委員会構成について

ア）代表幹事選出

議長より片桐氏を推挙。全会員賛同にて片桐代表幹事留任を決定。

イ）選考委員選出

出席者による2名連記投票で票数の多い上位4名を選出。

ウ）書記幹事、会計幹事および各委員会委員長名を選出　【別室】

選出された選考委員4名と代表幹事の計5名にて協議。以下の人事を決定。

会計（片山）／書記（水口）／販売・企画（吉岡）／調査・研修（森）／広報（岩野）

エ）各委員会の構成メンバーの選任　【別室】

＊選出された幹事（代表幹事、書記、会計と３委員長）により各員の希望も考慮

2022年度（第56回）人文会年次総会報告

書記幹事　水口大介

2022年度（第56回）の人文会年次総会は、2023年5月19日、「筑摩書房・会議室」において全会員社出席のもとに開催されました。

議事は、2022年度（2022年5月1日～2023年4月30日）の活動報告（全般）から始まり、会計報告、次いで「販売・企画」「調査・研修」「広報」の各委員会報告および質疑応答、承認と続き、新年度に向けての役員改選および各委員会所属メンバーを決定し、無事終了いたしました。

代表幹事には、昨年度に引き続き、全会一致で片桐幹夫氏（みすず書房）が選出されました。

会計幹事は片山伸治氏（吉川弘文館）、書記幹事は水口大介（創元社）が選出（いずれも留任）されました。委員会構成は昨年同様、「販売・企画」「調査・研修」「広報」の三委員会体制で会活動にあたることを確認しました。

各委員長（幹事）は、吉岡聡氏（春秋社）が販売・企画委員長（留任）、森卓巳氏（青土社）が調査・研修委員長（留任）、岩野忠昭氏（白水社）が広報委員長（留任）に選出されました。

また、日本評論社の休会が承認されました。

なお、各委員会の構成は、巻末の「人文会会員名簿」をご参照ください。

人文会会員名簿

〒113-0033　文京区本郷2-20-7　みすず書房内

2023年8月現在

社　名	担当者	〒	住　所	電　話	FAX
大　月　書　店	佐藤　信治	113-0033	文京区本郷2-27-16 2F	3813-4651	3813-4656
紀伊國屋書店	段塚　省吾	153-8504	目黒区下目黒3-7-10	6910-0519	6420-1354
慶應義塾大学出版会	乙子　智	108-0073	港区三田2-17-31	3451-6926	3451-3124
勁　草　書　房	東原　亮佑	112-0005	文京区水道2-1-1	3814-6861	3814-6854
春　秋　社	吉岡　聡	101-0021	千代田区外神田2-18-6	3255-9611	3253-1384
晶　文　社	福士篤太郎	101-0051	千代田区神田神保町1-11	3518-4940	3518-4944
誠　信　書　房	郡司　恵太	112-0012	文京区大塚3-20-6	3946-5666	3945-8880
青　土　社	森　卓巳	101-0064	千代田区神田猿楽町2-1-1 浅田ビル1F	3294-7829	3294-8035
創　元　社	水口　大介	101-0051	千代田区神田神保町1-2 田辺ビル	6811-0662	3219-7800
筑　摩　書　房	河内　秀憲	111-8755	台東区蔵前2-5-3	5687-2680	5687-2685
東京大学出版会	澤畑　塁	153-0041	目黒区駒場4-5-29	6407-1069	6407-1991
日本評論社（休会中）		170-8474	豊島区南大塚3-12-4	3987-8621	3987-8590
白　水　社	岩野　忠昭	101-0052	千代田区神田小川町3-24	3291-7811	3291-8448
平　凡　社	栗生　圭子	101-0051	千代田区神田神保町3-29	3230-6572	3230-6587
法政大学出版局	三木　拓	102-0073	千代田区九段北3-2-3 法政大学九段校舎1F	5214-5540	5214-5542
みすず書房	片桐　幹夫	113-0033	文京区本郷2-20-7	3814-0131	3818-6435
ミネルヴァ書房	本橋　弘行	101-0062	千代田区神田駿河台3-6-1 菱和ビルディング2F	3525-8460	3525-8461
吉川弘文館	片山　伸治	113-0033	文京区本郷7-2-8	3813-9151	3812-3544

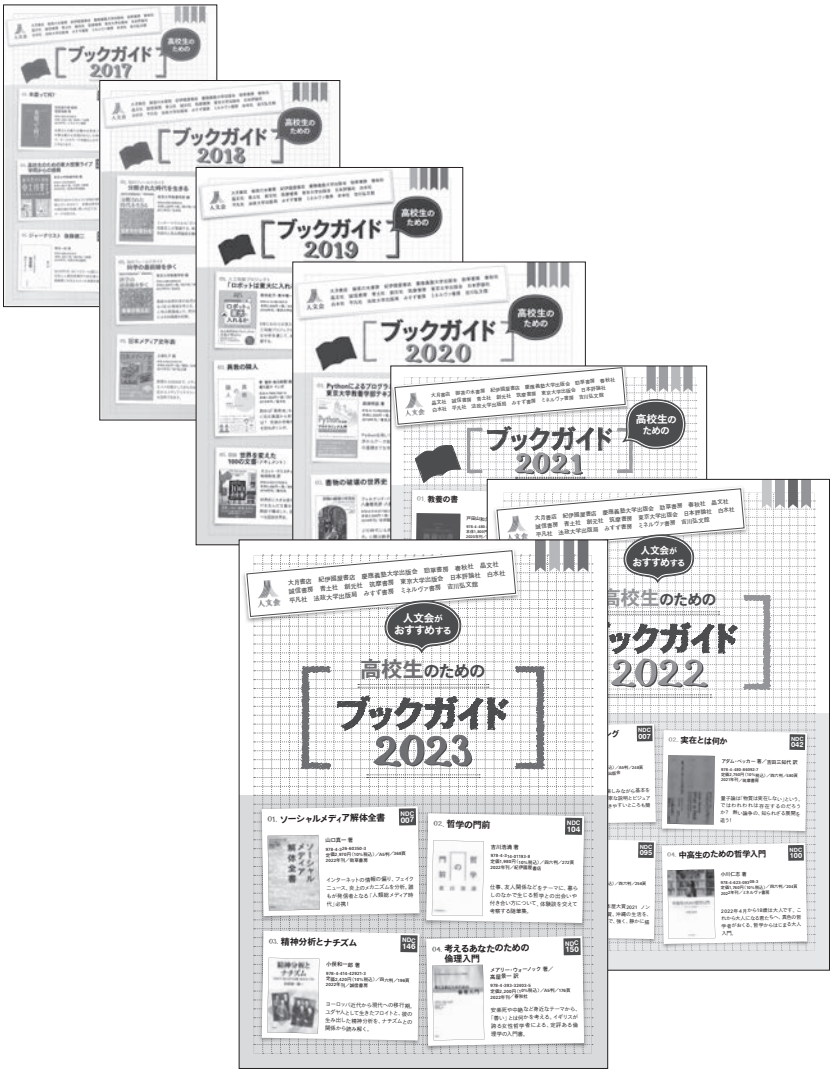
代表幹事	片桐幹夫
会計幹事	片山伸治
書記幹事	水口大介
	《◎委員長（幹事）　○副委員長》
販売・企画委員会	◎吉岡　聡　○段塚省吾・佐藤信治・福士篤太郎・郡司恵太・栗生圭子
調査・研修委員会	◎森　卓巳　○澤畑　塁・東原亮佑・河内秀憲
広報委員会	◎岩野忠昭　○乙子　智・三木　拓・本橋弘行

人文会ホームページ　http://www.jinbunkai.com/

（各種情報／各社へのリンクはこちらからどうぞ）

「高校生のためのブックガイド」のご案内

人文会では会員各社の刊行物の中から、高校生に読んでもらいたい書籍を2点ずつ厳選し、「高校生のためのブックガイド」として1枚のリーフレットにまとめました。書店外商部様や書店店頭でのフェアなどで活用いただいております。



人文会Twitter開設のお知らせ

このたび人文会ではTwitterアカウントを開設しました。

アカウント　@jinbunkai
https://twitter.com/jinbunkai

本会の活動やさまざまな情報を発信していきます。公式サイトよりもスピーディーに、また異なる視点からお伝えしていきたいと思っていますので、是非フォローや投稿のシェアをお願いします。

慶應義塾大学出版会
https://www.keio-up.co.jp/

わたしは、不法移民
ヒスパニックのアメリカ

カーラ・コルネホ・ヴィラヴィセンシオ著／池田年穂訳　1100万の見えないアメリカ人。不当な労働によって搾取され、虐げられ、精神を病む不法移民の実情を克明に描き、彼らの人間としての尊厳を取り戻す珠玉のノンフィクション。　◎2,640円

スヌーピーがいたアメリカ
『ピーナッツ』で読みとく現代史

ブレイク・スコット・ボール著／今井亮一訳
「スヌーピー」で知られる漫画『ピーナッツ』は、冷戦期のアメリカ社会とどう向き合ったのか。コミック、ファンレター、未公開資料などから探る、戦後アメリカのすがた。　◎3,960円

〒108-8346 東京都港区三田2-19-30【価格税込】
Tel 03-3451-3584 Fax 03-3451-3122

読んで旅する海外文学
24の国と地域の旅行記×77冊のブックガイド

大学生協職員として多数の本に触れてきた著者の、20年以上にわたる旅行記とその訪れた国にまつわる本を紹介するブックガイド。翻訳家、金原瑞人氏との対談収録。

【著】重松理恵
【定価】2,200円（税込）

勇気ある女性たち
性暴力サバイバーの回復する力

コンゴで組織的レイプに遭った女性たちを治療するムクウェゲ医師。社会の矛盾に立ち向かうサバイバーの姿から性差別克服を探求。

【著】デニ・ムクウェゲ（2018年ノーベル平和賞受賞）
【訳】中村みずき
【定価】2,750円（税込）

大月書店
〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-16
TEL 03-3813-4651　HP otsukishoten.co.jp

増補改訂版　言語哲学大全Ⅱ
飯田　隆
ロングセラー大河入門書第Ⅱ巻、約30年ぶりの増補改訂。続刊（Ⅲ・Ⅳ）も順次改訂予定。
税込3520円

知識資源のメタデータへのリンクトデータ・アプローチ
谷口祥一
急拡大するリンクトデータ化について網羅的に詳説。図書館情報学の実務家・研究者必携。
税込5280円

歴史を書くとはどういうことか
初期近代ヨーロッパの歴史叙述
小谷英生・網谷壮介・飯田賢穂・上村　剛　編著
誰が、何のために、どのように歴史を語るのか——歴史叙述の歴史を探求する。
税込4950円

勁草書房（けいそう）　TEL 03-3814-6861　FAX 03-3814-6854
〒112-0005 東京都文京区水道2-1-1
https://www.keisoshobo.co.jp

眠りつづける少女たち
スザンヌ・オサリバン　高橋洋訳

脳神経科医は〈謎の病〉を調査する旅に出た

１年以上眠り続けるスウェーデンの〈あきらめ症候群〉、悪魔の仕業とされるニカラグアの〈グリシシクニス〉他…オリヴァー・サックスの後継者として注目される著者が、心因性疾患の複雑さを神経科学の最新理論を交えて考察。地域や民族に固有の文化を軽んじ西洋医学に偏重しがちな精神医療の風潮や、不安を煽る一部マスメディアの報道に警鐘を鳴らす。

▶定価 2750円（10％税込）

紀伊國屋書店　出版部：東京都目黒区下目黒3-7-10　営業TEL03(6910)0519

キャリア教育がわかる

実践をデザインするための〈基礎・基本〉

児美川 孝一郎 著 キャリア教育の基礎・基本からホットな争点までをフォローし、その取り組みを学校の教育活動の「日常」に落とし込んでいく方法を探る。**2530円**

アタッチメントと トラウマ臨床の原点

ジョン・ボウルビィ未発表重要論集

R・ドゥシンスキー/K・ホワイト 編 筒井亮太 訳 生前に発表ができなかったボウルビィの重要論集。今日アタッチメント理論を思考・評価・使用している人に資するべく刊行が実現した。**3960円**

心理・教育・人事のための テスト学入門

繁桝算男 編 テストに携わる人が理解を深めたいテスト学の基礎から最新理論まで解説し、人事と臨床における活用場面まで幅広く紹介。**2970円**

誠信書房 SEISHIN SHOBO Tel 03-3946-5666 東京都文京区大塚 3-20-6

わかる！ニーチェ

●ピーター・ケイル　大戸雄真／太田勇希 訳

簡潔明瞭にして最新最良のニーチェ入門

偉大な哲学者でありポストモダンのヒーローであり日本でも大人気のニーチェ。しかしその姿が誤解・曲解によって捏造された虚像にすぎないとしたら？　既存のニーチェ像を最先端の研究から一新、現代のニーチェ研究の水準を提示する。**2420円**

ニーチェの道徳哲学と自然主義

『道徳の系譜学』を読み解く　**5280円**

●ブライアン・ライター　大戸雄真 訳　ニーチェの著作と手稿・草稿を分析哲学的なスタイルで読解。21世紀最先端の研究書。

春秋社 東京都千代田区外神田2-18-6（税込） ☎03-3255-9611　FAX 03-3253-1384

この自由な世界と私たちの帰る場所

河野真太郎

感情のポリシング、トランス排除、宗教右派、エコロジー思想からポストトゥルースまで。透徹した思考に貫かれた論考群。**1980円**

死政治の精神史

佐藤泉

「聞き書き」と抵抗の文学

石牟礼道子、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ、森崎和江、柳美里……「聞き書き」の政治学がここにある。**3520円**

無目的

トム・ルッツ

行き当たりばったりの思想

短い文章で構成されどこからでも読める本書は、無目的に読み進めることで予期していなかったどこかに私たちを導く。**2420円**

青土社 東京神田神保町 ☎03-3294-7829 http://www.seidosha.co.jp/（価格税込）

ゴースト・ワーク

グローバルな新下層階級を
シリコンバレーが生み出すのを
どう食い止めるか

超高速で拡大する「ギグワーク」。
文化人類学×計算社会学から深層に迫る
驚愕のルポ！激増する「見えない労働者」
とは何か。待望の邦訳！　2420円

「現在世界のどす黒い暗部を抉りつつ、
そこに一筋の希望の光を照らす。
そんな本だと思う」成田悠輔（監修・解説）

M・L・グレイ　S・スリ 著　柴田裕之 訳

晶文社 〒101-0051 千代田区神田神保町 1-11 Tel.03-3518-4940 Fax.03-3518-4944

遠藤　薫／山田真茂留
有田　伸／筒井淳也　［編］

災禍の時代の社会学

コロナ・パンデミックと民主主義

格差拡大や社会的孤立など、コロナ禍で顕在化した問題に第一線の研究者たちが立ち向かう。

2,860円（税込）

東京大学出版会
〒153-0041　東京都目黒区駒場4-5-29
TEL 03-6407-1069　FAX 03-6407-1991
https://www.utp.or.jp/

創元社

池崎忠孝の明暗

――教養主義者の大衆政治

★一人一冊で深掘りする、完全書下ろしの新シリーズ
近代日本メディア議員列伝・6巻

佐藤卓己著

元萬朝報記者、前大阪時事新報顧問の肩書で政界進出した典型的メディア議員に、教育・メディア・政治の観点から迫る人物列伝。

四六判・上製・552頁・2970円

大阪市中央区淡路町4-3-6☎06-6231-9010
千代田区神田神保町1-2☎03-6811-0662
https://www.sogensha.co.jp/〈税込価〉

尾原宏之［著］

大正大震災

忘却された断層

関東大震災はそもそも「大正大震災」だった。なぜ当時の日本人はあの大地震をそう呼んだのか？もうひとつの明治・大正・昭和の物語。●2200円

娯楽番組を創った男

丸山鐵雄と〈サラリーマン表現者〉の誕生

丸山眞男が畏れた兄とは？「日曜娯楽版」や「のど自慢」をはじめ現代の娯楽番組の基礎を創ったNHKきっての「大奇人」の生涯。●2420円

白水社　東京都千代田区神田小川町3-24
tel.03-3291-7811　●価格税込

日米戦死者3418人を突き止め、その声を拾い上げた圧巻の記録

記録

ミッドウェー海戦

澤地久枝　●ちくま学芸文庫　定価1870円

戦死者名簿と統計を付し、手紙やインタビューを通じて彼らと遺族の声を拾い上げる。前例のないその仕事の功績によって菊池寛賞を受賞した、個人のいのちの重さに触れる第一級の資料。

筑摩書房　営業部 03-5687-2680
＊定価は10%税込です。
https://www.chikumashobo.co.jp/

2023年8月25日発行　年3回発行　第144号
発行所　人文会
〒113-0033　東京都文京区本郷2-20-7　みすず書房内
編集協力　アジール・プロダクション
印刷　中央精版印刷株式会社

〈非売品〉